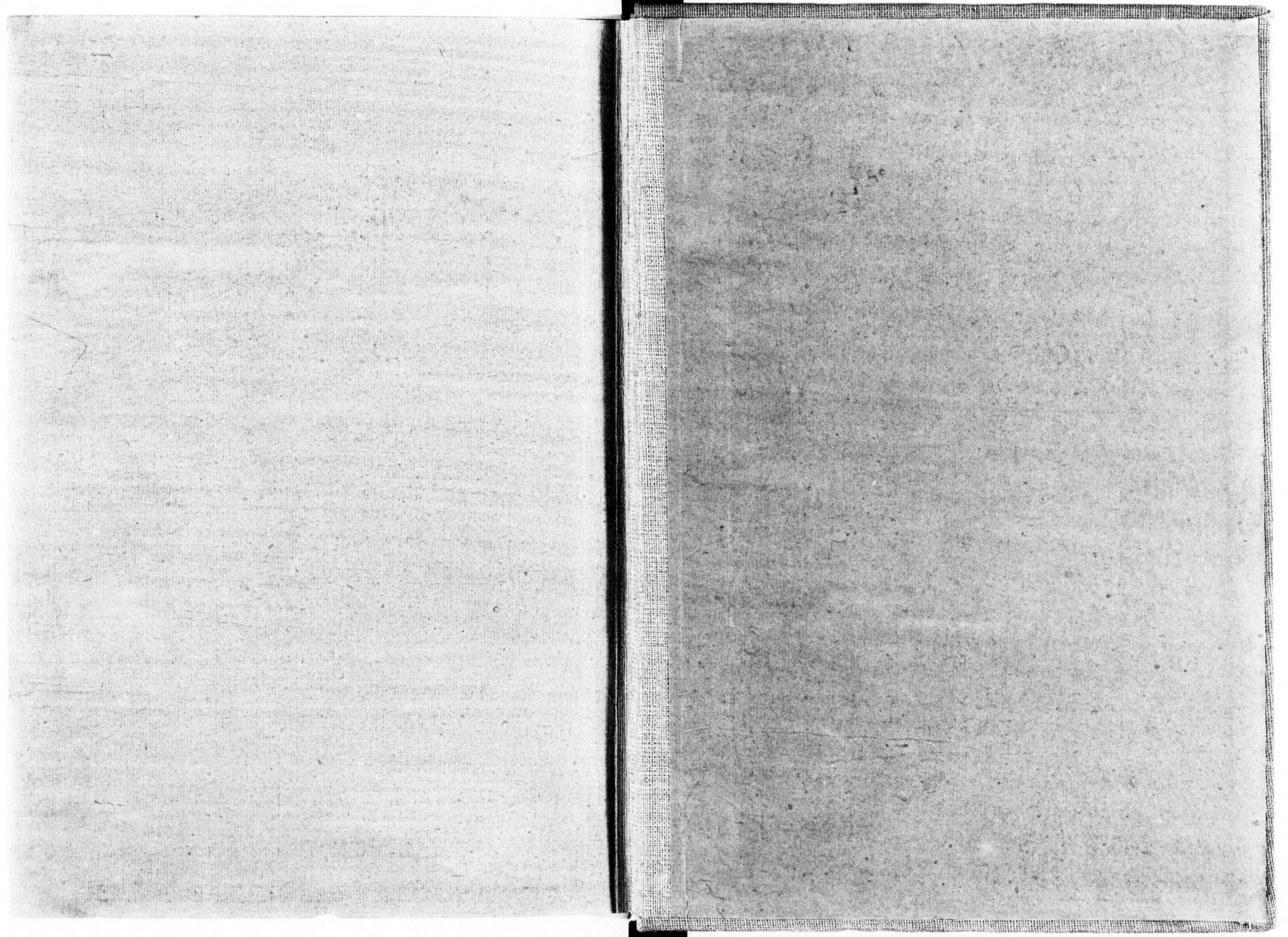


289
120

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

始





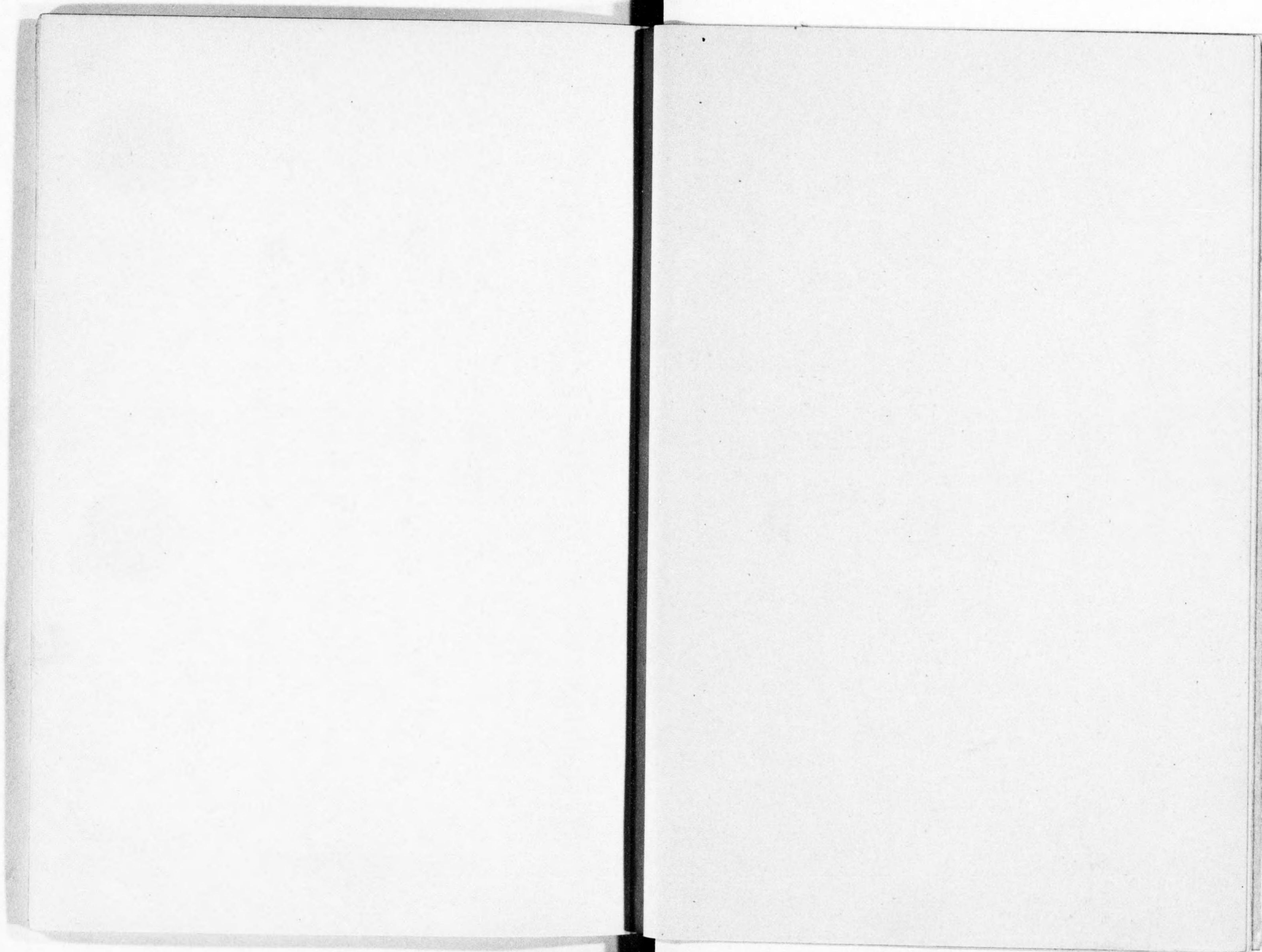
中西善次郎

Q 289
120



子男
 爵爵
 石武矢
 黑井野
 忠守文
 惠正雄
 跋序撰

安田善次郎傳



矢野文雄が——うんが何回かおれ
何年経たぬ病と——そが川の口を
親交のうま——その柳文をよめ
よ——何年か——因てまき——か入隊
こそから——な——

守山

おれが

おれが

おれが

おれが

おれが

おれが

おれが

おれが

おれが

序

余は安田松翁と相ひ識ること久しく、晩年特に親しかりき、故に翁歿して後ち數月、安田家より傳記編述の囑ありしを以て、乃ち之を諾したり、翁には自筆の日記あり、明治五年に始まりて、其の歿する年に及ぶ、五十餘年の永に亘て、公私の動靜、概ね記して遺すことなし、唯其の生れてより明治

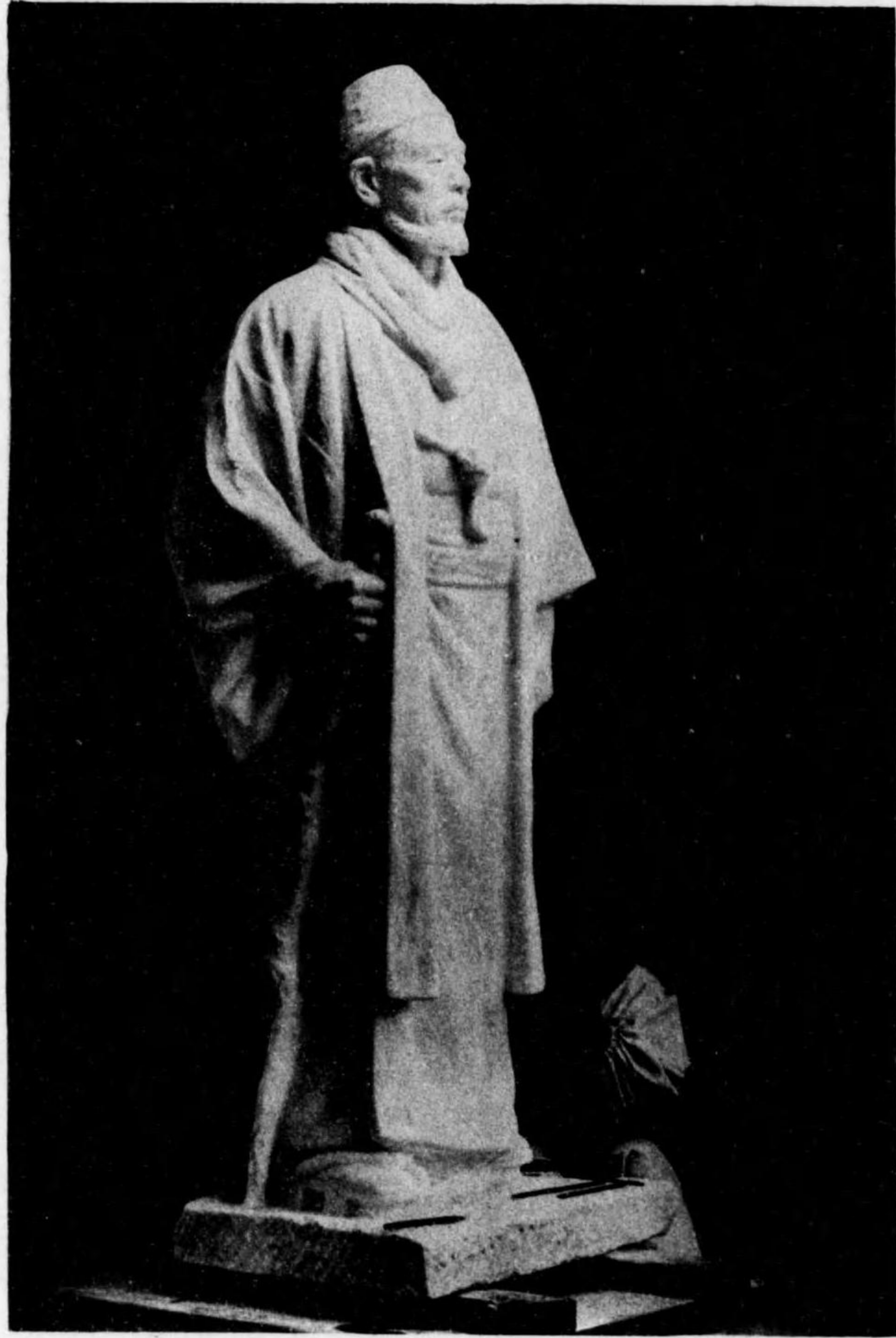
四年まで、三十四年間の事に至ては、更に
索聞捜査の必要ありしが、幸に翁に縁故あ
る耆舊宿老の尙ほ存するありて、其の資料
を充たすを得たり、翁は特異の性格を有す、
故に親交ありし余を以てするも、尙ほ其の
平生を悉くす能はざるを恐る、然れども後
人が翁の人と爲りを窺ふに於て、本書に據
り其の大體を知るに足るべき歟。

本書は大正十二年に脱稿せしも、後半年は
震災の爲め世事忙匆、校訂全からず、年を
越て之を安田家に送るを得たり。

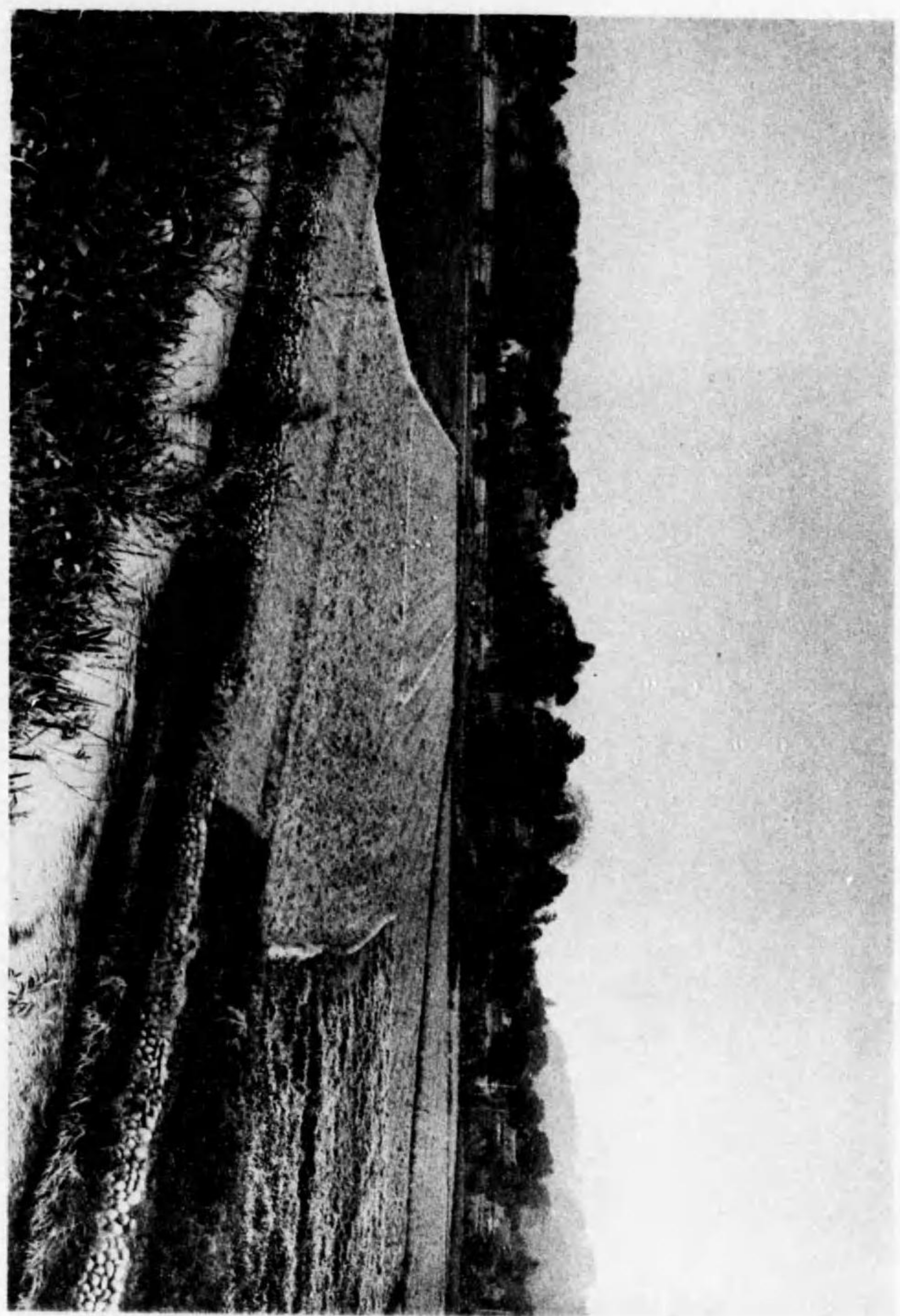
大正十三年初秋

矢野文雄識

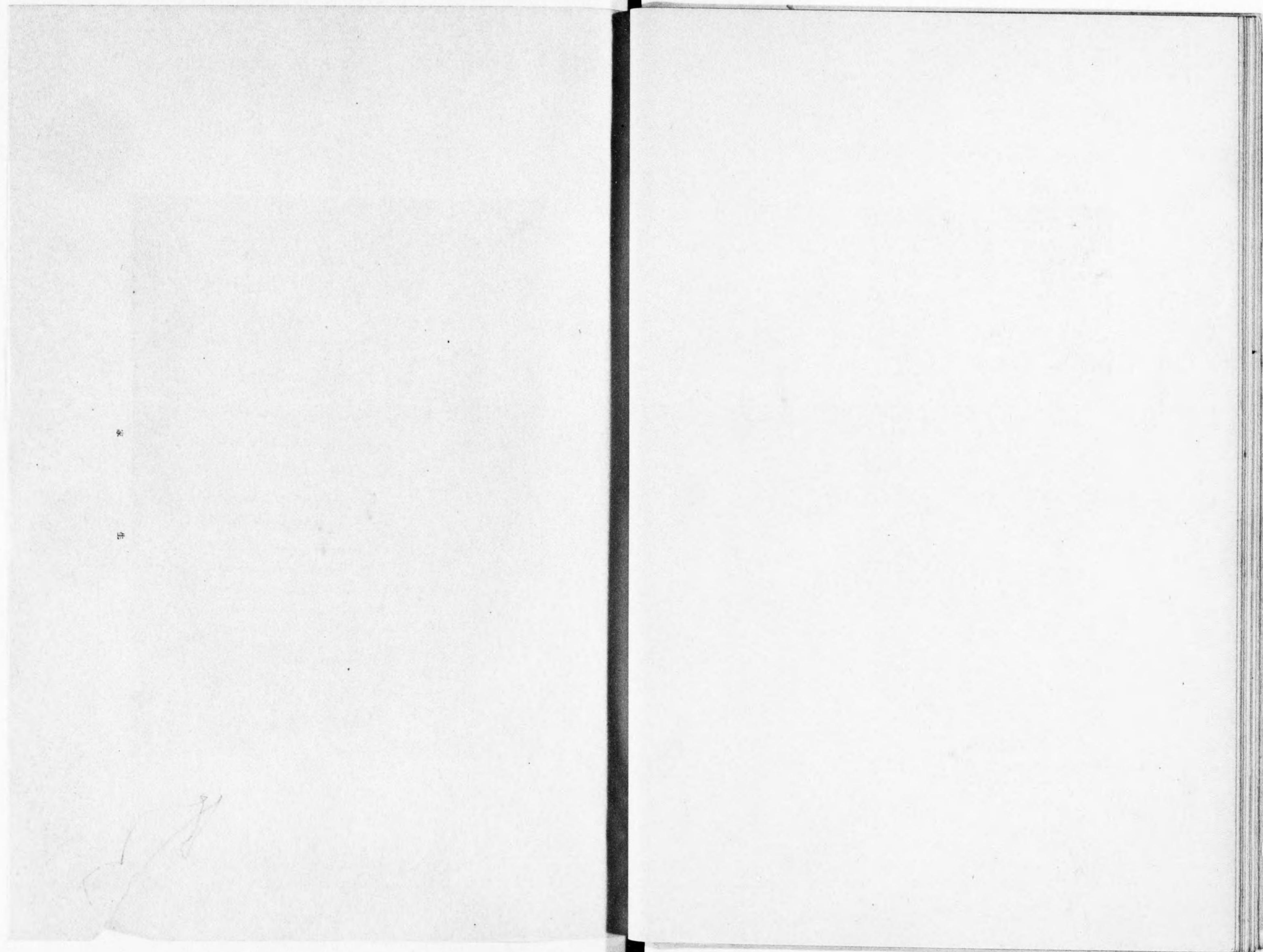
佐 海 四 村 北

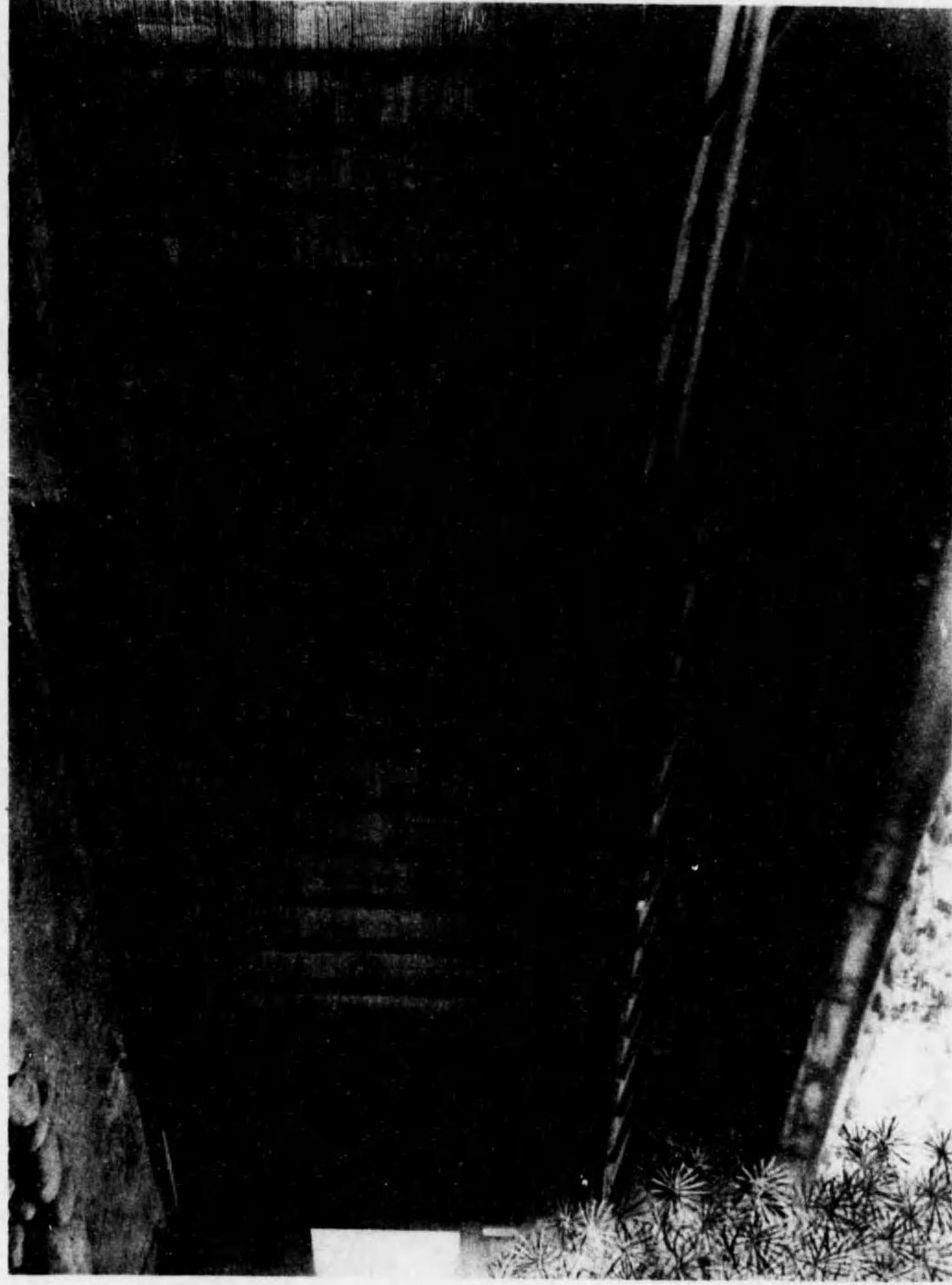


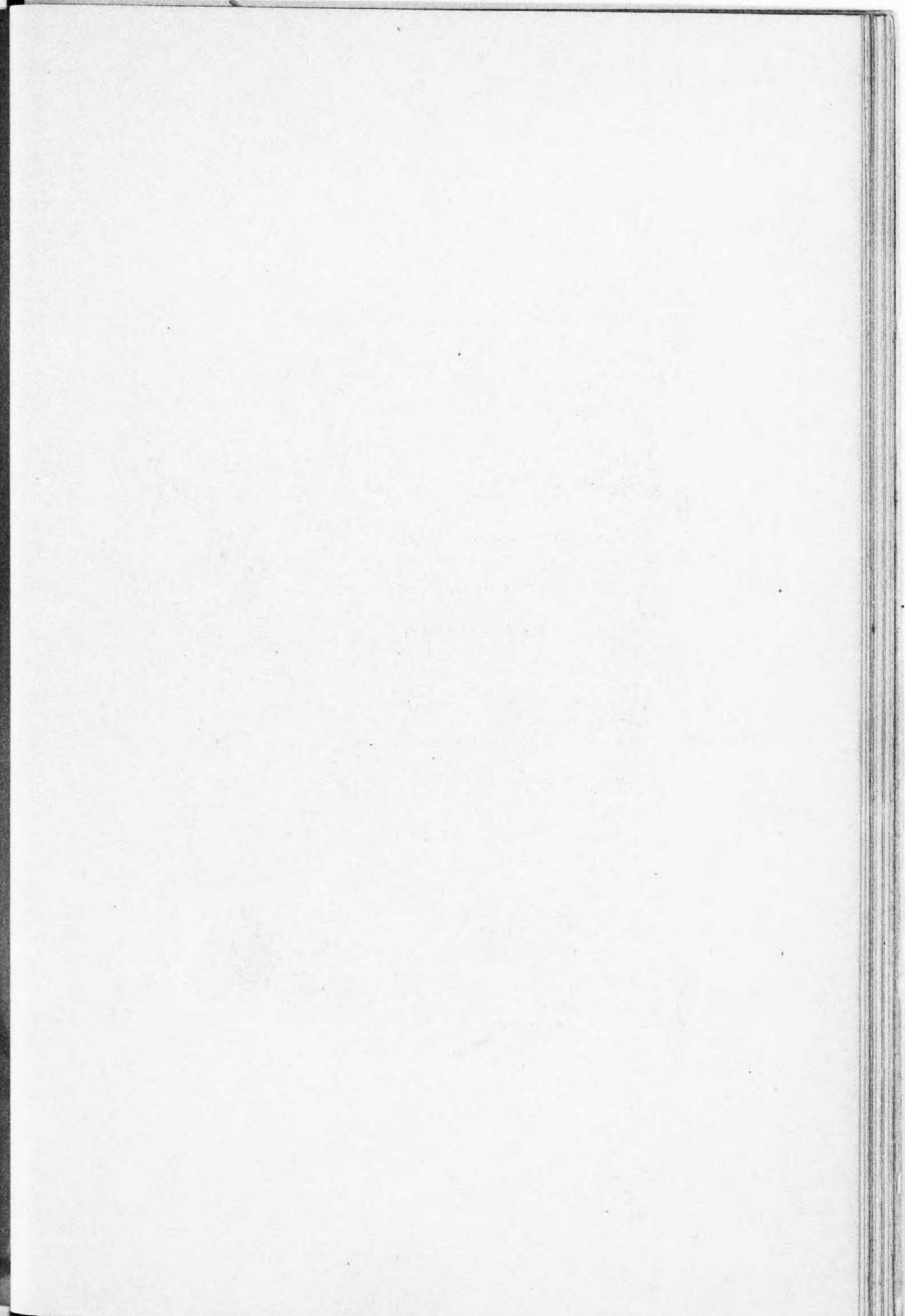
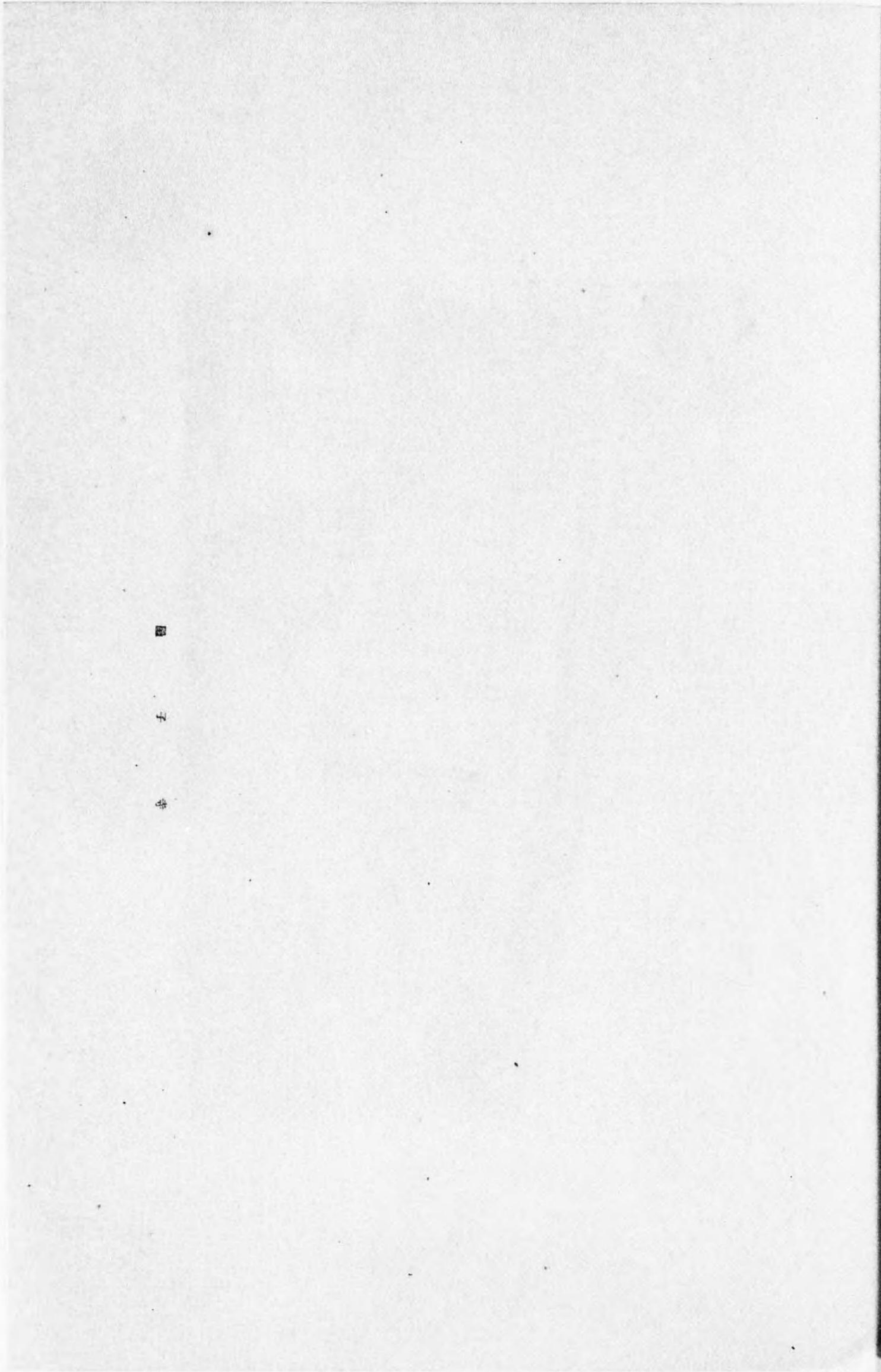
聖 道 村 田 安



新
華
社
出
版







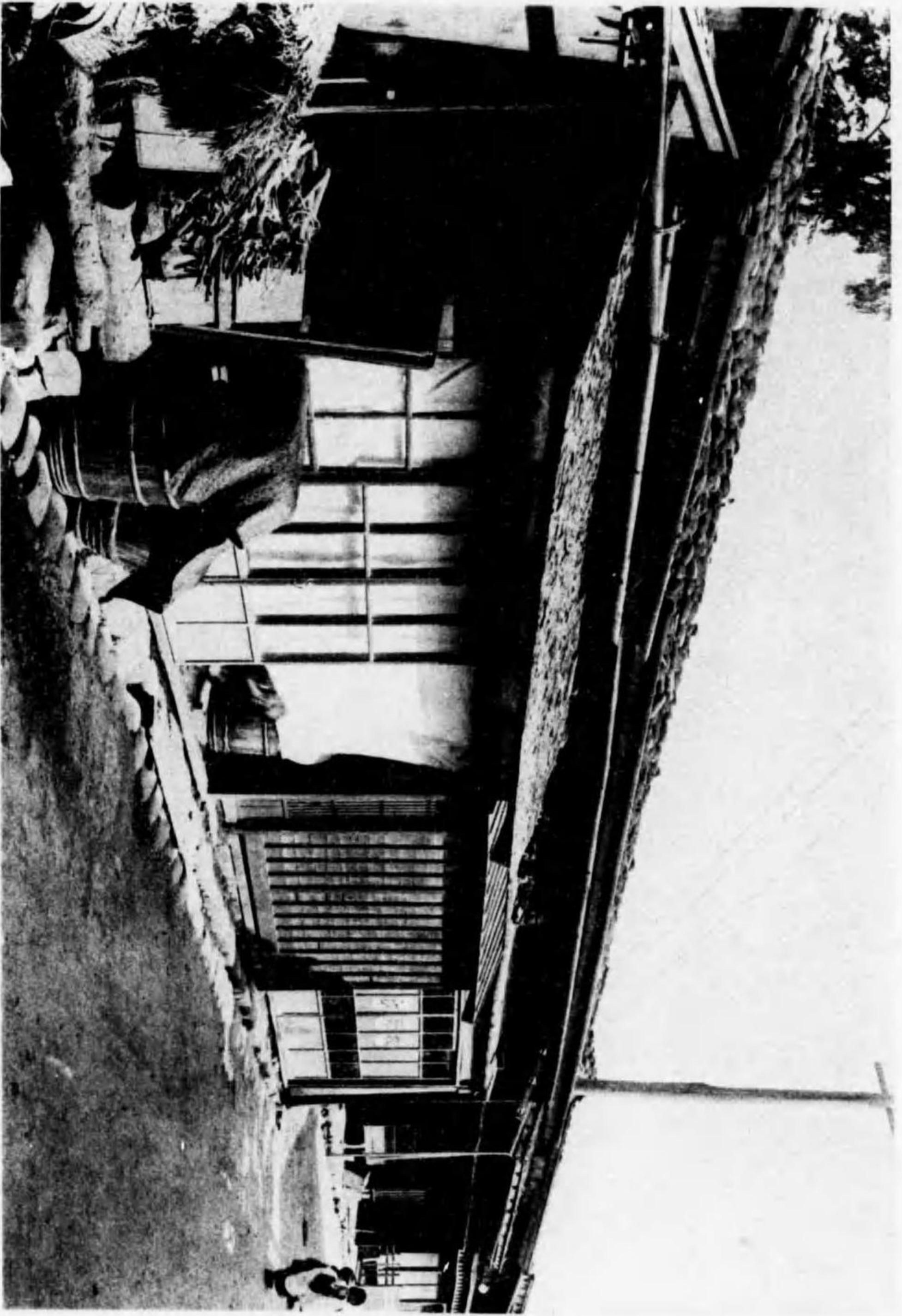
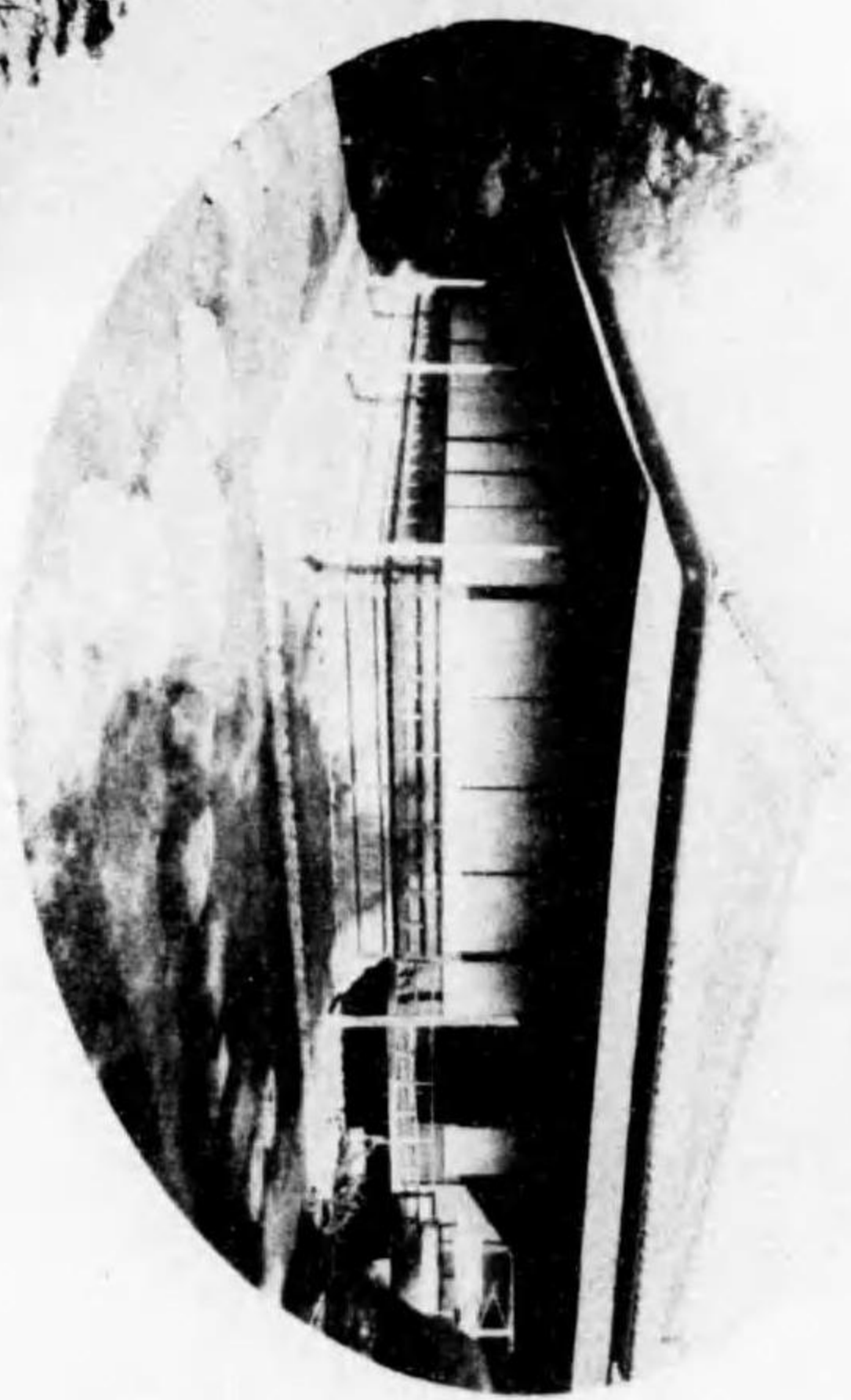
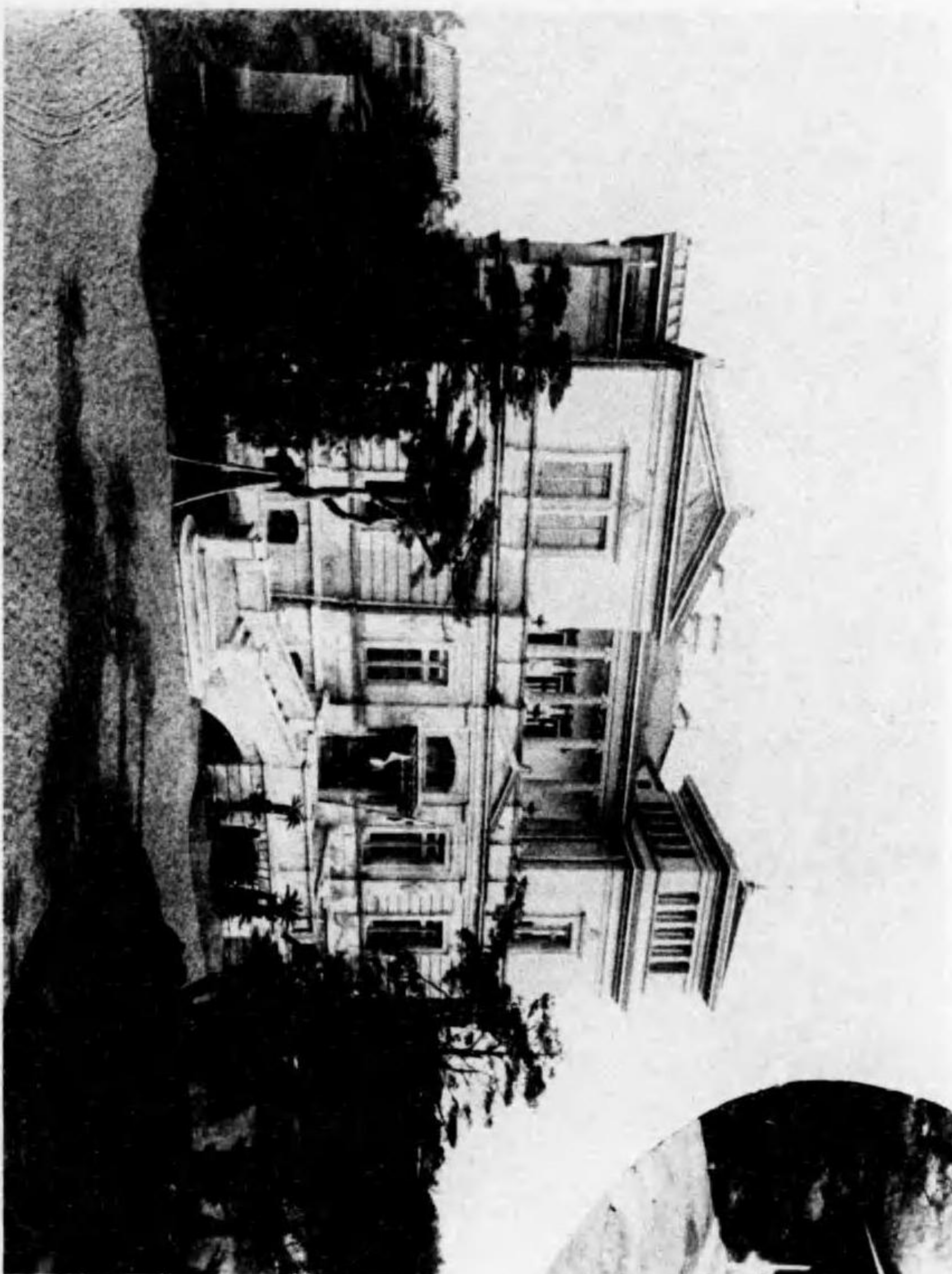


圖 五 六

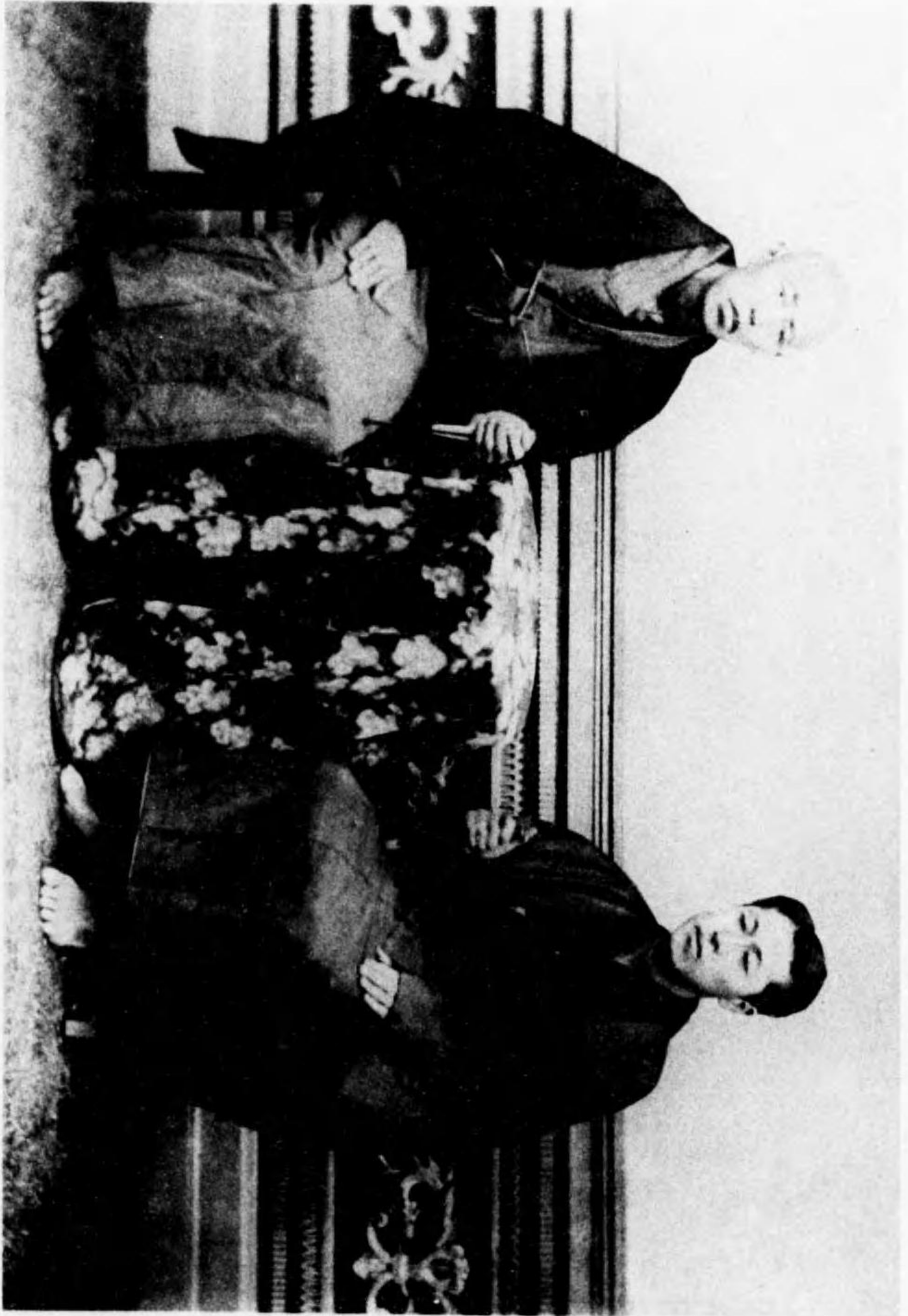
知 務 局
亞 田 安 納 船 所 本

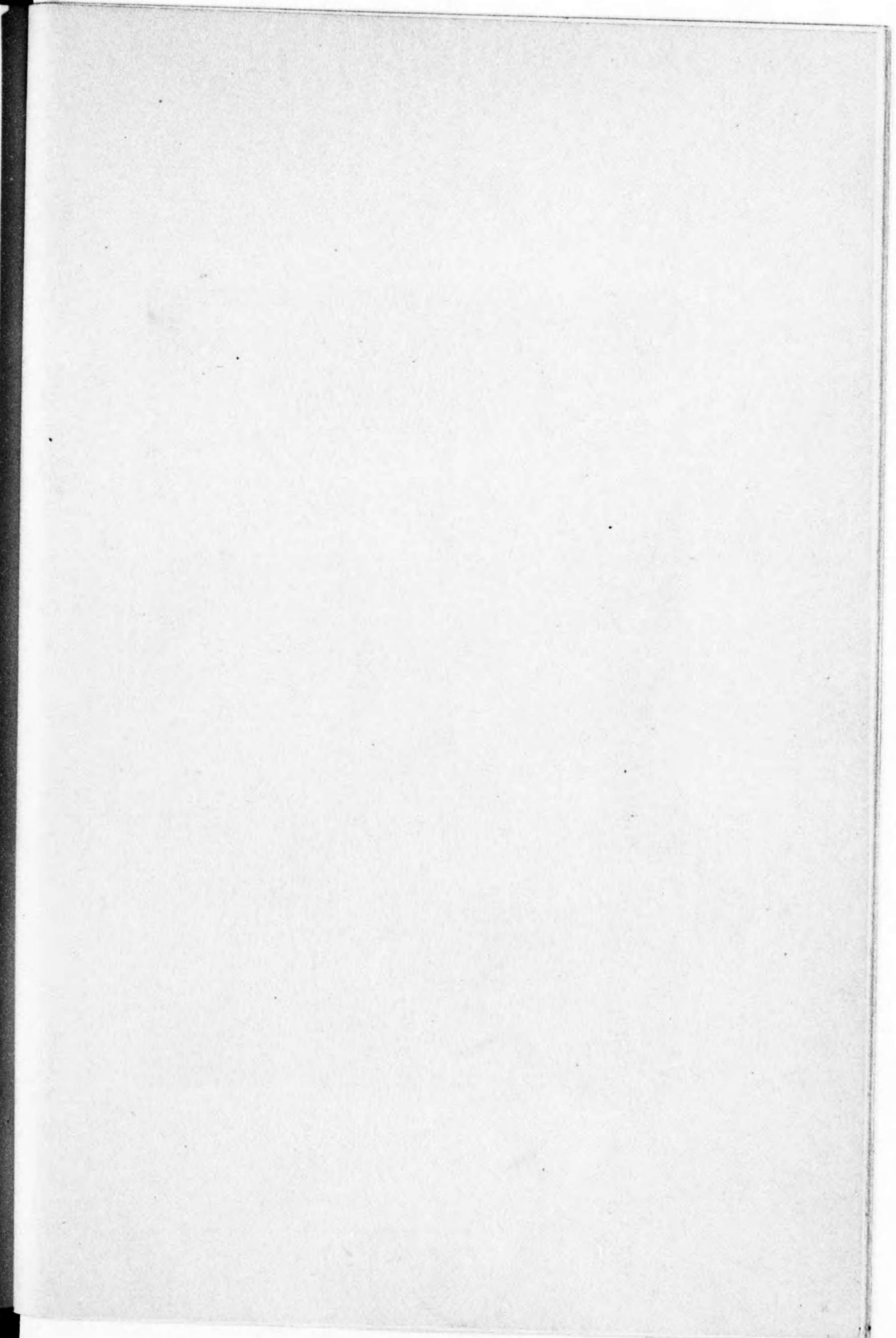
經 理 處 謹 啟

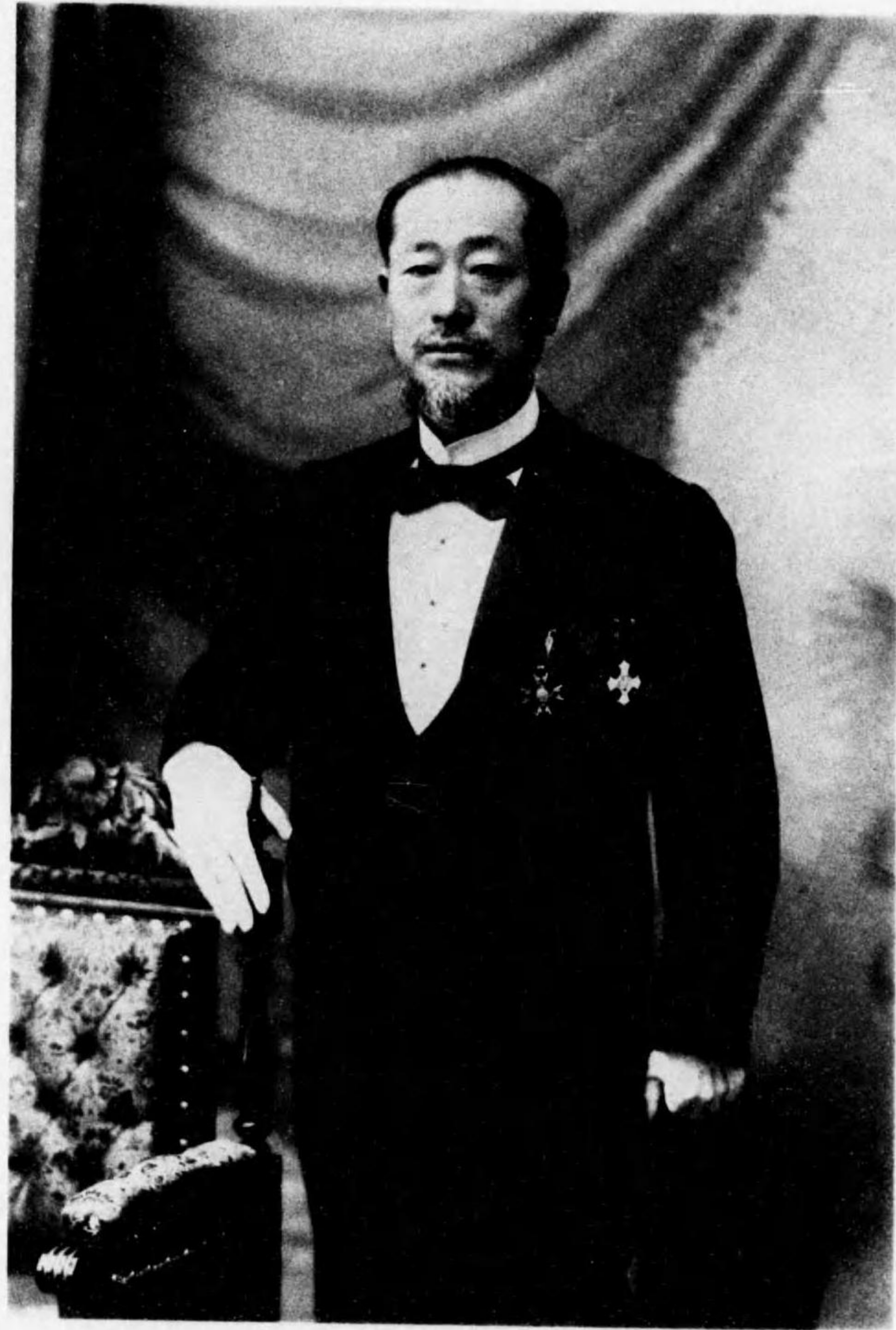


湖北教育

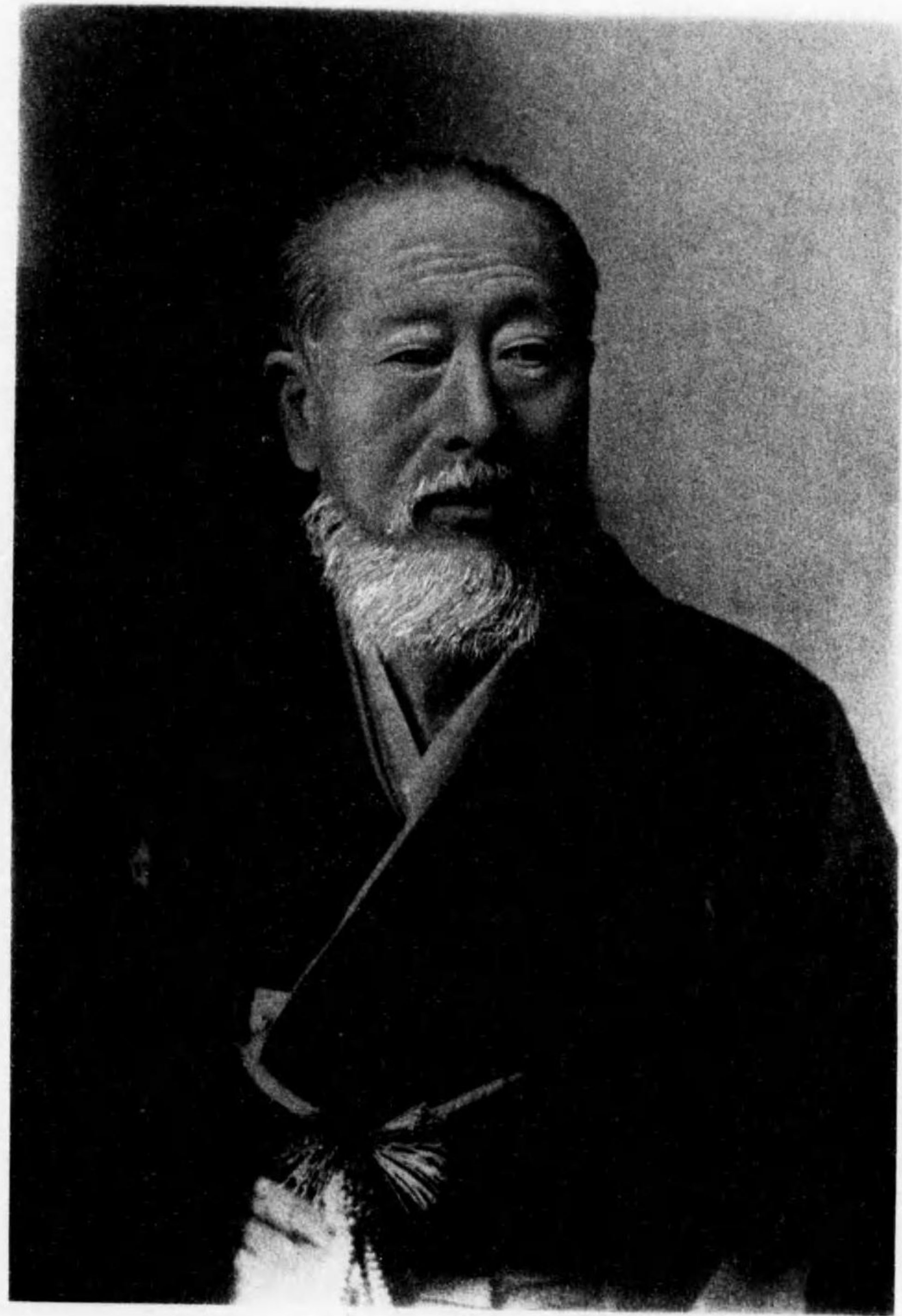
湖北教育









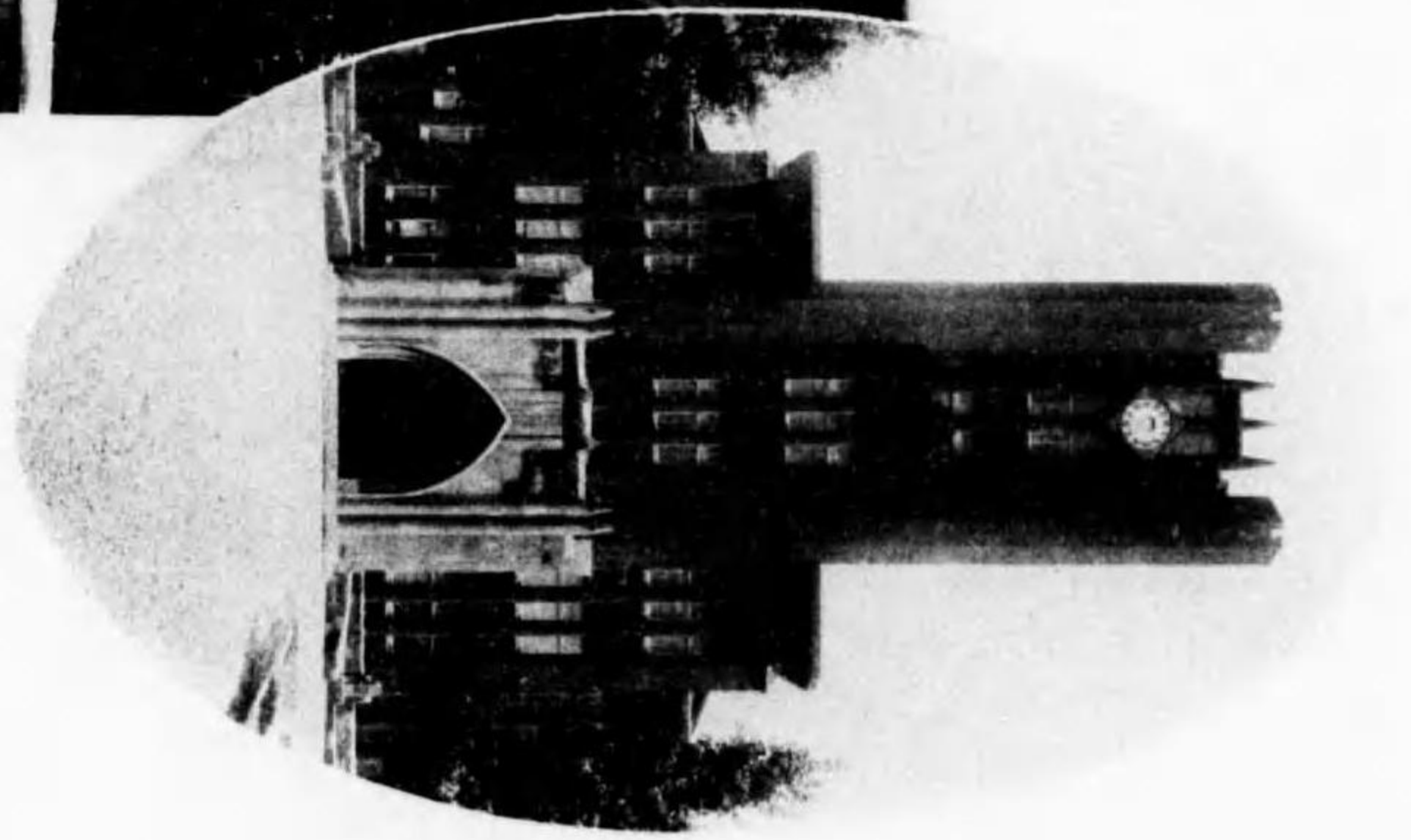
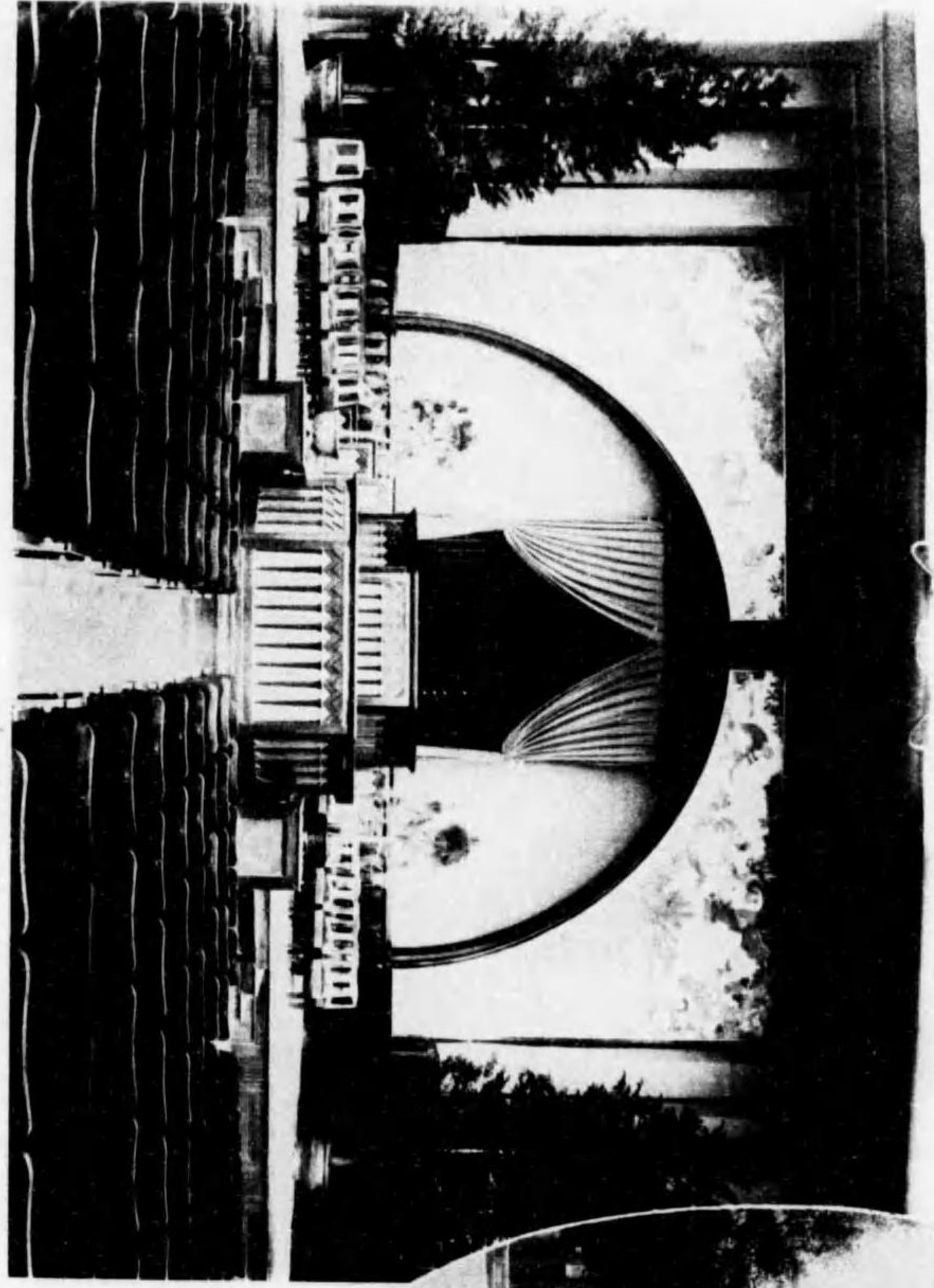




第一ノ内室

堂園田安徳大國寺京類

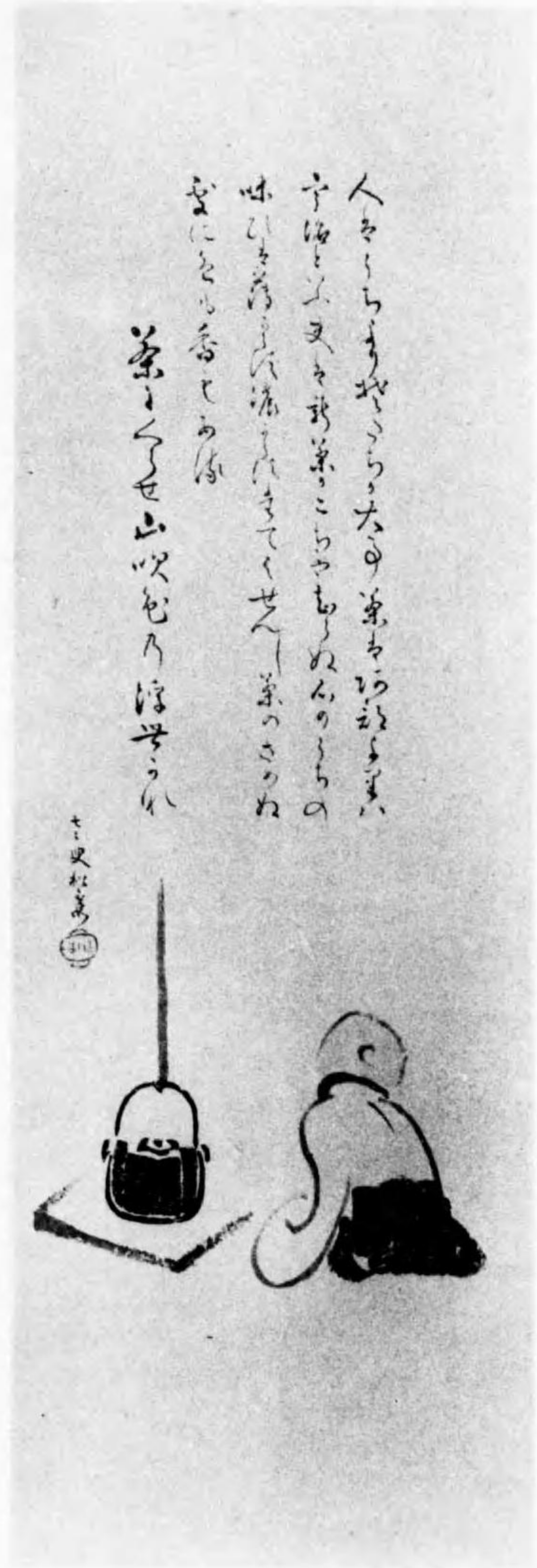
外



水 閣

第一八八號

東京帝國大學文庫藏



清節堪寒君子德
龍孫穿雪考兒譽



竹十
[Seal]

福生有基

[Seal]



大正二年秋月五日上記十六餘物皆實川邊又五保貨

[Seal]

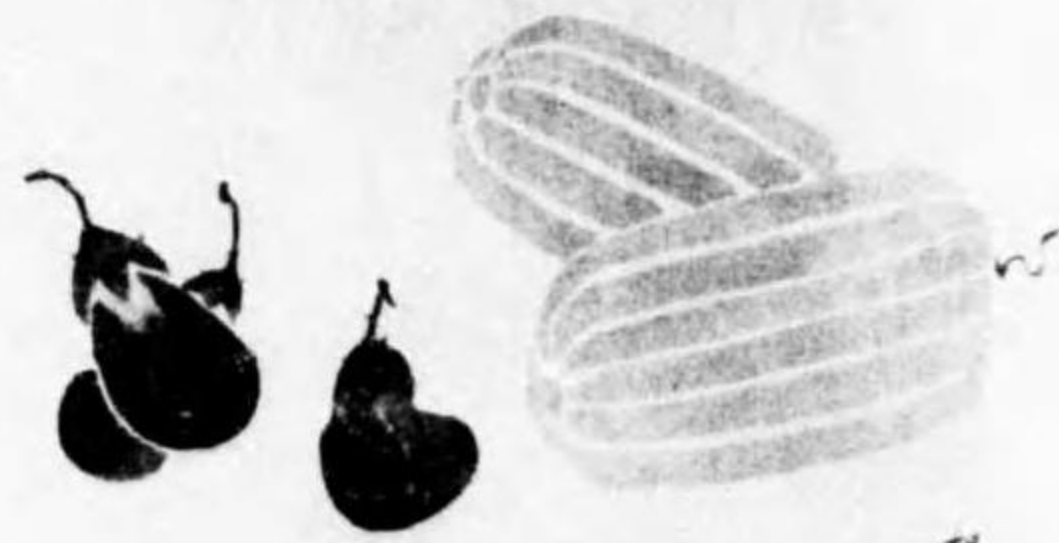
福生軒

如味海仁

事也

加吉豆華

瓜茄子



利十
[Seal]

苦と楽を

二ツに割下

算盤乃

多し

極

二ツ作

福一



母は日々に
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに



病いなくはあかきまで
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに
おぼろげに

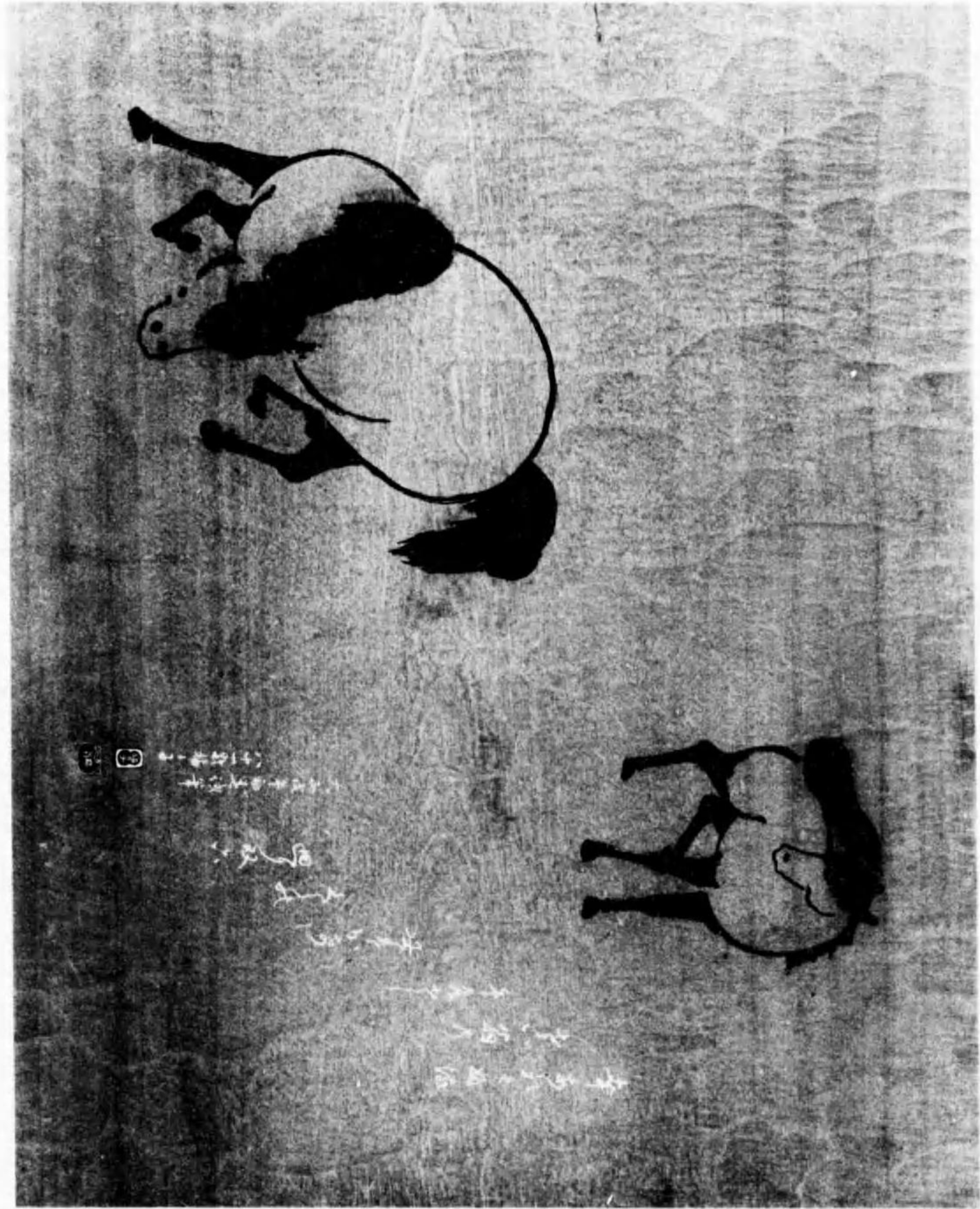


長生無極

六の桃乃一を
子孫と繋ぎ
於ふも枝々
か壽限りなり



八十為實り道人



己未年十一月十九日
己未年十一月十九日
己未年十一月十九日

己未年十一月十九日

己未年十一月十九日





福とら乃
孝
あや
大圖
徳とら乃
重
古
之
子

福とら乃
孝

忠

上事於君下交於友
內外一誠終能長久

孝

敬父如天敬母如地
汝之子孫亦復如是



忠孝節

今つらき

まけみはと
よ

明治二十九年

三月五日





今日一日にす

一 今日一日にす 研文 研文 研文 研文
わきれ 研文 研文 研文 研文

一 今日一日にす 研文 研文 研文 研文
研文 研文 研文 研文

一 今日一日にす 研文 研文 研文 研文
研文 研文 研文 研文

一 今日一日にす 研文 研文 研文 研文
研文 研文 研文 研文

一 今日一日にす 研文 研文 研文 研文
研文 研文 研文 研文

右 唯 今日一日にす 研文 研文 研文 研文

研文 研文 研文 研文 研文 研文

研文 研文 研文 研文 研文 研文

研文 研文 研文 研文 研文 研文

研文 研文 研文 研文 研文 研文

研文 研文 研文 研文 研文 研文

研文 研文 研文 研文 研文 研文



山
石

山石

年
黃
如
水



一

家

一

水在氣如春醪

寶川道人松翁



心海



作善以為實



八十三史實り道人書



安田善次郎傳

目次

第一 前記の一

一頁—一八頁

矛盾に似たる二様の性格

進取と堅守

細心と太つ腹

堅實と機略

貨殖と多趣味

器用と執着

六 五 四 三 二

一

強剛と温潤
積財と愛才

七
八

第二 前記の二

一九頁—三〇頁

治世にも亂世にも
心志を苦しめ筋骨を勞す
白刃の下に立つ
知識の欲求
地位と與に人格を高む
鼈の話

二〇
二三
二四
二七
二九

第三 前記の三

三一頁—四六頁

誘惑
悪戯
強健
模範の商家
使用人の仕込
其質實
人無きにあらず

三一
三三
三五
三九
四〇
四四
四五

第四 前記の四

四七頁—五七頁

羨むべき一
の幸福
父の健在

四七
四九

致富の二法

五一

稱贊と嫉悪

五二

不移怒、不宿怒

五三

取膳の話

五六

第五 前記の五

五八頁—七五頁

明察

五八

己を以て人に望む

五九

舊時の商店風

六〇

進んで止まず

六一

完人と仁人

六八

情緒の人
悠揚不迫
損得に對する喜憂

六九

七三

七四

第六 前記の六

七六頁—八五頁

圍碁

七六

書畫

七八

大借金家

八〇

良將の退軍

八一

根氣

八三

第七 本傳の一

八七頁—九八頁

生誕

八七

富山の地勢

八九

安田村

九二

富山の人氣

九三

賣藥行商

九四

幼時の環境

九五

其の父祖

九五

第八 本傳の二

九九頁—一〇九頁

下士の内職

一〇一

第九 本傳の三

一一〇頁—一二〇頁

七歳の花賣

一〇二

十二歳の行商人

一〇二

寺子屋

一〇二

分別者

一〇四

賃寫巧筆

一〇六

晝夜の辛勤

一〇七

江戸に出る決心

一〇八

太閤記

一一〇

十七歳の家出

一一三

山路に迷つて引返す

一一四

二十歳再度の脱出

一一六

江戸に着く

一一七

富山に連れ戻さる

一一八

許されて三度目の出發

一一九

奉公稼

一二一

第十 本傳の四

一二三頁—一三七頁

六年間の奉公

一二三

兩替業の習得

一二四

小賣業の見習

一二五

災厄不幸

一二七

露店の兩替商人

一二一

小兩替店の主人公

一三二

妻を迎へて共稼

一三五

小賣の繁昌

一三七

通貨の大變動

一三七

第十一 本傳の五

一三八頁—一五三頁

世界物價の變革

一三八

金銀對價の變動

一四〇

開港の影響

一四二

兩替商の大活動	一四三
一躍して大兩替店の主人公	一四五
仲間の肝煎役	一四八
冒険の大得益	一五二

第十二本傳の六 一五四頁—一六八頁

紙幣の發行	一五四
其の下落	一五六
金楮の差價	一五七
嚴罰の布令	一五九
紙幣の買入	一六〇

妹婿の撰擇	一六二
質屋の鑑札	一六四
東京大阪の爲替取組店	一六七

第十三本傳の七 一六九頁—一八〇頁

江戸兩替屋の業體	一六九
硬貨の種類	一七〇
大膽不敵の兩替屋	一七二
兩替屋の所得	一七二
六年目に大兩替店	一七八

第十四本傳の八 一八二頁—一九四頁

平吉の不幸

一八二

弗相場

一八四

獨立後七年目の財産

一八六

同九年目の財産

一九〇

全国各地金融機關の變動

一九三

好擔保の現出

一九四

第十五 本傳の九

一九五頁—二二二頁

秩祿公債金祿公債の利廻り

一九六

新舊公債多額の持主

一九七

預金の増大

二〇〇

半期賞與一例	二〇一
父を東京に迎ふ	二〇三
前途の商略	二〇六
官府の遊金	二〇七

第十六 本傳の十

二二三頁—二二七頁

人蔘の賣買	二一四
栃木縣の爲替方	二一四
京阪神の視察	二一六
明治九年の資本	二一八
預金の巨額	二一八

司法省の預金

二一九

銀行條例の改正

二二一

華士族の銀行

二二二

第三銀行の創立

二二四

暖簾店

二二五

第十七 本傳の十一

二二八頁—二四五頁

明治十年の行動

二二八

栃木縣下の施設

二二九

長閑に蚤縁あるも取入らず

二三〇

簿記の學習

二三二

知識の欲求

二三三

字體の變遷

二三五

社會上の地位

二三七

田安邸の購入

二三九

鳥居の寄進

二四〇

茶湯の稽古

二四三

府會及商法會議所議員辭退

二四三

第十八 本傳の十二

二四六頁—二五七頁

安田銀行の設立

二四六

夫婦京畿の遊覽

二四六

新設農商務省の爲替方

二五二

二省二縣の遊金吸収

二五四

満て驕らず

二五六

第十九本傳の十三

二五八頁—二六九頁

非常に對する準備

二六〇

取引の膨脹、準備の不足

二六〇

屈竟の機關

二六一

日本銀行の創立

二六二

同銀行の理事

二六四

最初の割引局長

二六四

第二十本傳の十四

二七〇頁—二八五頁

明治十六年の歸郷

二七〇

親戚故舊の賑恤

二七二

富山縣の爲替方

二七三

双方與に失す

二七五

將來投資の方面

二七八

拙碁會

二八二

第二十一本傳の十五

二八六頁—三〇〇頁

一代の基礎定まる時代

二八六

風を望て款を送る

二九一

前田家に出入

二九四

訛傳より取付

二九五

實況の説明

二九五

官金公金の減退

二九七

民間預金の膨脹

三〇〇

第二十二 本傳の十六

三〇一頁—三二四頁

日本銀行理事辭退と賞與

三〇一

地處の買入

三〇三

金融の迫塞

三〇四

北海道爲替方

三〇八

松方伯及毛利公を招く

三〇九

大木伯松方伯に招かる

三一

第二十三 本傳の十七

三一五頁—三三六頁

保險、金融、運送

三一七

三菱の先鞭

三一八

日本保險業の始め

三一九

三業經營の端緒

三二三

濱町大地面の買入

三二四

上州出張

三二五

前田侯の招宴

三三〇

第二十四 本傳の十八

三三六頁—三四二頁

不幸なる年

三三七

良き子あれば一人にて可なり

三三八

盛大の葬儀

三三九

居喪

三四〇

哀歌

三四一

第二十五 本傳の十九

三四三頁—三五〇頁

東本願寺と高野詣

三四三

歓迎を競ふ

三四五

製麻事業の端緒

三四六

雲龍出沒法

三四八

第二十六 本傳の二十

三一五頁—三五九頁

東京電燈會社の救済

三五一

雪團の滾轉

三五三

圍碁、茶會、謠曲、乘馬

三五七

茶會の記

三五八

第二十七 本傳の二十一

三六〇頁—三七二頁

神戸の土地手入れ

三六一

日本銀行監事

三六一

同銀行の新築主管

三六二

濃尾震災地の視察

三六三

日本銀行基礎工事

三六四

舊池田邸の買入

三六六

木馬の献上

三六七

第二十八 本傳の二一十二

三七三頁—三八六頁

金融界の好材料

三七四

株式と取引所

三七五

大利益の材料

三七七

海上保険

三七八

兵庫運河

三七八

社交上の交際饗宴

三七九

釧路の硫黄山

三八四

第二十九 本傳の二一十三

三八七頁—三九八頁

代議士候補の固辭

三八八

煩を避けて旅行

三八九

新洋館の落成祝

三九〇

十數回の饗應

三九二

馬術の卒業

三九四

再度候補に擬せらる

三九四

歸郷の歡迎

二九六

第三十 本傳の二十一

三九九頁—四二三頁

代議士に當選及び辭退

四〇〇

日清開戦

四〇四

砲運丸と運搬會社

四〇七

家族同伴京畿旅行

四一〇

戦後の好景氣

四一一

有利なる新會社の株式

四一三

第三十一 本傳の二十二

四一四頁—四三三頁

地方鐵道に放資するの企

四一四

各種保險會社の遊金

四一五

貸出の苦心

四二一

口數少く金高多きもの

四二二

本業以外の事業

四二八

日本銀行新築の落成

四三一

主管任務の完結と賞狀賞金

四三一

第三十二 本傳の二十三

四三四頁—四四三頁

日本の養子

四三五

歐米支那の例

四三五

戦國時代の養子

四三六

余との初對面

四四〇

電燈會社との關係

四四二

第三十三 本傳の二一十七

四四四頁—四五四頁

大阪市築港公債

四四四

間接の利益

四四七

茶事の交友

四四九

貸出の觀察法

四五三

第三十四 本傳の二一十八

四五五頁—四七一頁

硫黃山の結局

四五五

使用人の手當

四五七

一族子弟の教養法

四六一

品格良き遊戯

四六三

政府事業の委員

四六六

諸銀行の救済合併

四六七

諸事業の施設

四六七

第三十五 本傳の二一十九

四七二頁—四八四頁

竹竿の如し

四七二

日露開戦

四七三

大阪第三百三十銀行の救済

四七五

七十歳の資産

四八二

第三十六 本傳の三十

四八五頁—五〇二頁

事業と私交との區別

四八五

京都の紳商

四八六

支那の張之洞

四八七

老婆を避く

四九一

和敬會

四九八

第三十七 本傳の三十一

五〇三頁—五一五頁

保善社の組織

五〇三

二種の資本金

五〇四

一族の生活法

五〇五

逋租脱税の爲にせず

五〇六

半隠居の姿

五〇八

公職と會社銀行の施設

五〇九

叙位授勳

五一〇

濟生會

五一一

彼此の撰擇取捨

五一三

使用人の忠實

五一三

第三十八 本傳の三十二

五一六頁—五二七頁

四分利公債の獻策

五一七

慈善事業の意向

五二〇

富豪の心懸

五二二

事業次第人物次第

五二三

洋行せぬ巨人と英物

五二四

第三十九 本傳の三十三

五二八頁—五四二頁

歐洲の大戦

五二八

好景氣の時代來る

五二九

三井三菱に次ぐ

五二九

養子離居

五二九

再び事務を視る

五三二

大正九年の財力

五三四

第四十 本傳の三十四

五四三頁—五四四頁

一代富限の第一人

五四三

損益與に莫大

五五四

株式價格賣崩しの噂

五四五

宿志未遂の二大事業

五四六

懷抱せる新大計畫の三ヶ條

五五〇

第四十一 本傳の三十五

五五五頁—五七四頁

晩年の傾向

五五五

義捐の度数と金高の増加

五五六

會者定離の悟入

五五七

大正十年の奇禍
龍を描いて晴を點せず

五六六

五六七

五六九

安田氏の家系

年譜

一頁—二七頁

—目次了—

安田善次郎傳

第一 前記の一

矛盾に似たる二様の性格—進取と堅守—細
心と太つ腹—堅實と機略—貨殖と多趣味—
器用と執着—強剛と温潤—積財と愛才—

江戸を距る百里の僻境に生れ、陋巷の寒家に人ご爲り、
寺子屋の外は、高等の教育を受くるの機會なく、赤手單
身にて郷關を出でたる一少年が、其の一代に於て、貳億
圓と稱せらるゝ資産を積み得たるは、我が國數百年の財

界を通じて、蓋し希靚の事に屬す、而して其主人公たる者、亦希靚の性行なくんばあらず。人皆多く特長あり、進取して止まるを知らざる者あり、堅く守りて失はざる者あり、前者は其の得る所甚だ多し、雖ども、之を失ふ所亦多し、後者は之を失ふ所少し、此の得る所亦甚だ少し、是れ一方に偏する者が、與に大を致すこと能はざる所以なり、然るに今若し人ありて、其の進取するや止まる所を知らず、其の守るや得る所を失はずせば、何人も蓋し其の成功を疑はぬであらう。

又絶代の巨富を得んこと企つる者は、多く皆太腹である、而して經營の事柄が有利の者たるにも拘らず、十の八九まで失敗するもの多きは、何故であるか、他なし、事

を成すに當つて、細心緻密を缺く所あるが爲である、又中級の富を致す者を點檢するに、其の多くは細心緻密である、彼等は、大抵十の八九まで成功する、併し其の成功たるや規模偏小にして、雄大の氣象を缺き、幾ぞ觀るに足る者がない、然るに今若し人ありて、其の事を謀るや太腹、之を成すや細心緻密ならば如何ん、恐らく何人も其の成功を疑はぬであらう。

進取堅守とは兩立し難く、太腹と細心とは矛盾に近い、故に之を兼有併備する者は、世間幾ぞ稀有と言ふて可い、而して余は獨り之を安田善次郎氏に見出し得るのである、余が二十餘年の交際より觀察して、氏は實に此の特異なる性格の所有者であつた。

我邦の財界に於て、幾百年間に絶無僅有とも稱すべき

絶大の巨富を、氏が一代に積み得たるは、其の原因、一にして足らぬこと勿論である、然れども其の主なる者を擧ぐれば、先づ上記せる稀有の性格を、其の一と認めねばならぬ。

併し上記する如きに止まらず、氏は尙其他、常人に兩立し難き二様反對の習性數種を兼有して居たことは今更一奇と考へられる。

凡そ堅固なる人は、機略に乏しく、機略に富む者は堅實を缺くが世間の常である、然る處氏は商略に於て縦横機敏であるが、其の本領は却つて堅固な所に在る、手堅き事は氏の長所でありながら、一方に於る商略駈引は、實に目覺しき者がある。

又致富貯金を一生の大事と心得て、孜孜矻矻寤寐にも

之を忘れぬ貨殖家には、多趣味の人は極めて稀である、又諸事に多趣味風流なる人は、動もすれば貨殖に凝り固まらぬものである、處が氏は大貨殖家たるにも拘らず、實に風流多趣味であつた、書畫も大好き、骨董も大好き、茶の湯もやれば、謠曲もやる、圍碁も大好き、乗馬も好きであつた、余は初め或は之を交際の道具に利用して居るのではないかと疑つたこともあつたが、決して左様でなく、全く自己の眞趣味からであることを知つた、書畫の如きも氏自ら日本古今諸名家の死生年表などを作つて楽しんで居た、又骨董も非常に好きで、苟くも其の展覽や賣立などあれば、之を見に行かぬことは幾ど無かつた、又謠曲の如き、茶の湯の如き、皆大好きである、石黒況齋翁は氏と多年の茶友達であるが、余は嘗て翁に、安田氏

が此の道に眞趣味を有するや否やを問ひしに、『氏は眞の
愛好家で、晩年は特に造詣も深く同好の茶會には必ず参
じ客として主人の用意を察知するに頗る周密で眞に茶會
の旨味をよく了解會得せられ都下でも有数の茶客であつ
た』この答であつた、自餘の事も亦蓋し同様で、皆全く天
性の多趣味から出たもので、決して貨殖致富の交際に利
用する爲では無かつた、一方にはあれ程まで貨殖致富に
熱心でありながら、あれ程まで諸事に多趣味風流な人も
一寸看出し難いやうである。

又世の中には、諸事に器用な人があるもので、何をさ
せても相應にやつて除けるが、多くは散漫で、一事一藝
に徹底して凝り固まる性質に乏しいやうである、然る處
氏は器用な上に事物に凝固まり、蘊奥を究めざれば休止

せぬ性質を持つて居た、乗馬を始めると四五年も熱心に
研究して、馬術練習所から卒業免状を取る、又茶の湯を
始めるに、千家の奥傳を得る、書を學ぶに晩年美事に上
達する迄休止せぬ、書を學ぶに又一寸觀られる迄に上達
する、謠曲を始めると暇さえあれば其の筋の師家を招い
て學ぶことを怠らぬ、一方にあれば程の大事業を爲しつゝ、
一方に斯く迄、餘藝に熱心な人は、幾ぞ他に看出し難い
と思はれる。

又強剛不屈の性を有する人は、其の氣象が自ら外に表
はれ、其の言動が動もすれば無愛想に傾き、不遜傲慢に
見えることが多い、内は強剛不屈にして、外は愛嬌ある
謙遜溫和の態度を失はぬ者は頗る稀である、處が氏は又
之を併有して居た、其の人に對するや常に温乎として愛

嬌がある、何處までも謙遜辭讓でありながら、其の内心の強剛不屈なることは、已に世に知らるゝ如くである、是等も一寸他人に看出し難い所である。

氏の體格は長大でなく、いくらか小造りの方であつたが、左ればこて決して短矮でもない、肥胖ならず、瘦羸ならず、先づ俗に所謂、中肉中脊で、がつしりと緊つた方であつた、其の容顔も若年の頃は、秀麗と稱して宜いほどの男振であつた爲め、自然に人なつかしき所が有つた、斯る風采が又更に氏の態度を、一層溫潤に見えしめることを助けた様である。

貨殖家は、よく金の力を知り、大抵の事は金力で片付け得るを熟知し居る爲め、動もすれば人に對するの態度が、富を恃み不遜に傾く事がある、右は金満家の通弊こ

目せられて居るころであるが、善次郎氏のみは全く然らず、或人が氏を評して、日本の富豪家中に、未だ曾て此の如き謙讓の態度ある人を見ぬ、と曰ひしも誣言でないと思はれる、百萬圓時代の氏も、千萬圓時代の氏も、億萬圓時代の氏も、其の腰の低きこと、いつも同様で、曾て異なることが無かつた、若し其姓名を知らずして之に接見せば、尋常中産階級の、紳士ごしか思はれず、千萬長者の安田善次郎氏ならんごは誰人も思寄らぬほごの態度であつた、蓋し其の能く此の如き所以の者は、封建の舊時に於る商人の態度を其儘に持續するの心懸こ、又一には事理に通曉して、金錢以外に尙廣濶の天地あるを知り、世態は萬相にて、富のみを以て誇り難きを知悉したるご、又一には、其の志望の宏壯にして、飽くまで進

みて止まらざるが故にいつも己の富を以て足れりさせず、自ら視る事甚だ小なるに因りしなるべし、百萬の富も千萬を望む者の目には小富なり、千萬の富も、億萬を望む者の目には小富なり、百億を望む者の目には、一億も物の數ならず、其の志愈々大なれば其の見る事愈々小なるは人の情なり、氏が常に己の富を大なりさせざりし事も、亦氏をして傲慢の態度なからしめし一大原因なりし如し、氏の態度が常に愛嬌ありて、いつも謙遜に見へしは、氏を知る者の、何人も否む能はざる所ならん。

又世上の金満家の中には、富の力を過大視して、金力以外の天地あるに氣付かず、藝術技能の士に重きを置かぬ者が多い、偶々彼等を愛する如く見ゆるも、多くは之を幫間視するに過ぎぬ、紀文の其角に於ける如き類であ

る、彼等にして眞に藝術の士を愛敬する者は誠に寥々と言つて宜い、然るに善次郎氏は之に反して、士を好み才を愛するの天性を有つて居た、唯自家の大目的たる致富の事業に忙しくして、廣く士に接するに違あらざりし爲め、人の之を知る者が少いのである、氏は年少なる彫刻の名工に後援を與へて、遂に名を爲さしめたる如き事もあり、又重野成齋、森春濤、大沼枕山、向山黄村等當時著名の詩人六七名を時々別荘に請じて、會合を催さしめし如き事もある、然れども右も名聞の爲めにあらず、唯詩客の吟詩を見て自ら樂むに過ぎざりき、故に之を知る者もない。

又陋巷に未知の一寒儒を訪ふて其の窮を賑したる如き、隠れたる事實もある、氏を知悉せざる人に向つて之を説

かば、或は疑ひ怪む者すらあるべし。雖ごも、苟くも氏
ご親交ありし者は必ず之を首肯するならん、余の如きも
余に對する氏の交際振りより推して、必ず之れあるべき
を信ずるのである。

氏は菊花を好み、自ら植木屋を督して、之を後園に栽
培せしは人の知る所であるが、毎年開花の時に至れば、
必ず美事なる懸崖の一鉢を、余に贈り呉れざるこなし、
又手道具類を注文作製せしめ、面白き物あるときは、折
々之を贈り呉るゝこもあり、余が訪問する時は、如何
に多忙の際にも延見せざるこなく、書面を送る時は、
直に自筆の返書を寄せざりしこなし、余に對してすら
右の如し、況んや著名なる藝術技能の人々に向つては、
尙更のこなるべし、又余は七八年前重患に罹りしが、

回復期に向つても、衰弱の爲め讀書すること能はず、唯
書畫幅を壁上に懸け、終日之を眺めて消光するのみなり
き、是時なご氏は煩を厭はず三日目毎に、其の藏幅を取
替へて貸覽せしめた、又海外より得たる珍果杯あれば、
見舞として之を贈り呉るゝ等、頗る親切の仕打なりき、
抑余は已に政界を謝し去たる一閑人に過ぎず、余に交る
ごも氏の事業に於て寸毫も益する所なきは明白の事なり、
又氏ご余ごは經濟界に何等の關涉もなく、趣味上に於て
も碁の相手にもあらず、茶の湯仲間にもあらず、謠曲の
付き合ひもなければ、乗馬の友達にもあらず、然るに余
に接する斯の如き所以の者は、蓋し余が嘗て政界に奔走
せしごか、讀書を好むごかの爲に外ならぬのである、之
を要するに、氏の多趣味なる天性は、氏をして才を愛し

士を好むに至らしめたものであり、又一には自己が幼時
教育の不充分なりしを恨悔して、學藝技術の士を羨み、
之に交るを樂むの情を生じたものらしくも見えた、又一
には是等の人々の談話を理會し受入れ得るほどの明敏な
る天性ありしにも因るのである、然らざれば如何に黽勉
するごも、其の談話に倦み、厭怠の情を生じて、交際は
永續せられぬものである、何れにしても此點に於て、氏
は世間普通の貨殖家ご、大に其の趣を異にして居た、氏
が早く接するの機會ありし文士は、成嶋柳北氏にして、
其の交際は、成嶋氏の歿する迄も渝らず、歿後の建碑も
善次郎氏が自ら擔當して力を盡せし所なりき、村上專精
氏も亦氏の接せし一人なりき、此の人の爲めには帝國大
學講座の基本金數萬圓を寄附したり、大槻如電氏も氏ご

懇親の間柄らしく見ゆ、定めて禮を以て永く遇せられし
ならんご察せらる、余が知る所を以てするも是れ其例の
二三なり。

世人の知る如く、福地源一郎氏は一代の文豪であつた、
日々新聞社長時代に於ける氏が一枝の筆は、能く舉國の
人心を左右し得て、當時の盛名は、之ご肩を比する者が
無かつた、然るに不幸にして其の晩年は、實に落寔を極
め、特に死に垂んたる病中家計の不如意は、説くに堪へ
なかつた由、其の時の事である、善次郎氏は一日其の親
近者を使ごして、氏に一封の書を贈た、氏は之を延見し、
其の書を披封するご、書面ご與に小切手が現はれた、氏
は書面を讀み了り潜然ごして落涙し、使者に向ひて曰ひ
けるは、某より求めもせざるに斯る厚意を盡さるご段、

實に何とも御禮の申し様がない、併し之を受るも心ならぬ故に、金員だけは持ち返つて貰ひたいと、是に於て使者は、持ち返れば自分の役目も立たず、且つは主人の意にも反すべし、一應御受けありて其の上の事に願ひ度いご答へた處、氏も之を受納した、右は其の時の使者から後年余が聞く所の事實である、福地氏の全盛時代に、持てはやしたる金満家等の、氏を救ふ者も無き窮時に於て人知れず善次郎氏が、心を用ふる事此の如きは、文豪の末路に深き同情を寄せたに外ならぬ、特に最近親者の一人を此の使に選びしは、此の事を人に知らしめざるの注意に出でし譯にて、福地氏の爲に謀るの深きを察するに足るのである。

又著名の塑像家北村四海氏は其の成立までに善次郎氏

の後援を受けし事あるを以て、洋行の時には氏の助を借りずして出發した、かくて在歐中氏は豫期する研究を積みしが歸朝に臨んで病の爲め旅費に差支を生じ、遙に書を日本に知友等に送つて、援を求めたが、其の調達心に任せず、彼等も策の出づる所なく、當惑を極めて居た、而して四海氏からは、催促の書状が頻着するに云ふ有様であつた、善次郎氏は此の窮状を漏れ聞くと、直に充分なる資費を給し、別に安田の名を知らしむるなかれと固く戒めた、是は安田家に厄介を懸けたくなしこの本人の意志を重んずる爲であつた。

右に掲ぐる事共は余の見聞する所に止まるのである、尙之に類する事實の隠れたるもの少なからざるべしと思はれる。

全豹を知らずして一斑を見、之を批評の基礎と爲すことは、正鵠を誤らざる者幾ど希なり、況んや善次郎氏の如く、反對に類する種々の性格を併有して、上下、前後、左右の六面とも各不同の物體に似たる者に於てをや、氏を評するの難き蓋し茲に在るものこそす。

第二 前記の二

治世にも亂世にも 心志を苦しめ筋骨を勞す 白刃の下に立つ 知識の欲求 地位と 與に人格を高む 鼈の話

勤儉力行は氏が常に唱道した所である、併しそれのみでは善次郎氏と爲り得ぬのである、眞個の安田善次郎を生出せんごすれば、進取と與に堅守であらねばならぬ、太腹と與に細心緻密であらねばならぬ、堅實と與に機略を併有せねばならぬ、強剛不屈と與に溫潤柔和であらねばならぬ、貨殖に熱中する傍ら、多趣味であらねばならぬ、單に勤儉力行を以て氏の本領を盡せりと考ふる如きは未だ深く氏を知るに足らぬものである。

斯く希覯なる諸種多様の性格を具有する點より觀察すれば、氏は治亂を問はず、如何なる時代にありても致富に成功し得たるべく思はれる。夫の冒險太つ腹のみの事業家が、或る時運に際會せぬ限りは、其の力を伸べ得ざるここ、恰も一坪の大風が大風を待たねば飛颺し得ざる如き類ご同じからぬ、氏は平時普通の風にも十、二十の小風を放つて、氏の志を遂るの技倆を有して居た、氏の材を以てすれば、平穩無事の日に出るも、尙能く其の志を遂げ得たであらう、況や我邦千古未曾有とも稱すべき社會大變革の時代に遭遇せしに於てをや。

「天の將に大任を此の人に下さむとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞す、」と云へる古語は、嘗に濟世利民の大政治家、大宗教育家、大道德家の身の上の

みならず、苟くも何等かの大業を爲さんと欲する者の總てに向つて、皆當嵌るべき言葉である、氏の如く一生に絶代の富を致す人に在つても、亦先づ非常に心志を苦しめ、筋骨を勞する後に非らざれば、其の大本願は遂げ得られぬのである。

氏が幼齡から少年までの間、又少年から成年までの間、肢體の勤苦は一通りでなかつた、又僅かなる獨立營業の資本を得るまでの心志の苦勞も、亦異常であつた、斯く其の心身に一大試練を経來つて、茲に始めて其の本願を達するの資格が完備したものである、特に少額ながらも必要の資本を造り出す爲には、強剛不屈の性格が最も必要であつた、氏が江戸に出で、二十歳前後に、辛じて兩替の小店を出せしは、時恰も幕府の末造、維新の二三年

前で、其の頃の世上の物騒なるは、想像に餘りがある、
已に幕府の威令行はれず、法網地に墜ち、白晝にも強盜
匪徒が、大手を打振つて横行する紛亂の折柄である、其
の頃は未だ銀行なるもの無く、世上金銀を所有せる者は、
唯兩替屋のみであつた、故に強盜も竊盜も、浪人も暴徒
も、目を注ぐ所は、皆悉く兩替屋に在つた、故に當時此
の商賣ほど、危険至極なる者は無かつた、特に維新の前
年などは、物騒も其の極に達し、江戸市中の兩替店は大
抵、戸を閉ち休業せぬ者は無つた、此の間に立て、此の
危険を物ともせず、さゝやか乍ら、尙店を開いて營業し
て居たものは、蓋し善次郎氏一人であつた、其の爲め此
の店の繁昌はたいした物であつたが、之と同時に其の危
険も亦大變であつた、朱鞘の長刀を帶し、腕を扼した浪

人匪徒の、ゆすり強談は、本より覺悟の上であらねばな
らぬ、此等の者は店に坐り込んで、單に脅威を示すのみ
ではない、事に依れば實際に一刀を見舞兼ねぬ時代であ
つた、是等の場合に於て、夫の優男も見ゆる善次郎氏
は少しも動ぜず彼等に應對して之を追返すのであるが、
其の危険千萬なること夥しい、今日尙生存せる老人中に
は、其の頃近所に丁稚同様に追使はれて、常に氏の兩替
店に往來し、此の状況を目撃して、恐しさのあまり、遠
方に離れて、手に汗を握りながら眺めて居たご云ふ者も
ある、(長井利右衛門氏直話) 致富の爲には、氏は若年か
ら斯様に白刃の下を潜つて來た強か者で、其の強剛不屈
なることは稀有である、氏の此の性質は、何處迄も、又
何事にも、附隨して離れず、其の成功も實は多く之に歸

せねばならぬと同時に、此の性質は又或は他日奇禍の因を助けたかも知れぬ、孰れにもせよ、其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞する、大試練場を経來つた強か者である、然るにも拘らず、氏は平生極めて謙遜溫和であり、又人に對して、毫も往事を談ずるを好まぬ、故に是等の事實を聞いて往々意外に感ずる人さへあるのである。

又氏は、自己の知識を増すことに於て、非常に心懸の篤かつた人である、本傳にも記する如く、氏は元寒微の出である上に、其の幼時は世上の教育も、今日の如く普及せぬ舊幕時代の事であるから、寺子屋にて手習、素讀の外は、深き教育を受くる機會の無つた事勿論である、而して氏も常に深く此の事を遺憾として居たから、成人の後、特に獨立後は、其の知識を増益するに、些かの油

斷も爲なかつた、小店ながら兩替店の主人公になれば、それ相應の知識を得るに勉め、進んで大兩替店の旦那になれば、又共に相當する知識を貯ふる等、自己の位置次第に昇るに従つて、共に相當するだけの知識を得つゝ、其の位地を辱しめぬだけに、人格を上げて進み行くことが出來た、是亦致富の一原因で、なかなか常人の能くし難き點である。

中級の富に甘んずる五十萬圓、百萬圓の富家翁たるには手廣き交際も必要ならず、従つて左迄の知識を要せずして濟むが、苟くも一國金融の管鍵を把握するほどの大富豪大立物たらむに欲するには、それ相當の識慮と人格とが無くてはならぬ、何となれば幾千億の金を繰り廻はす身分となれば、或場合には大藏省との聯絡をも圖ら

ねばならぬ、一國政府要路の人々も交渉を試みねばならぬ、此の關係此の交渉を爲し得ぬやうでは、迎も其の地位を全くすることは出来ぬ、此の交渉を爲し此の關係を結ぶには、財界朝野の最高位に在る人、對等の交際をなさねばならぬ、此の場合に於て如何に我より對等の交際を望むとも、其の識慮人格が下劣ならんには、先方は之を相手とせず、自然と除外されて仲間はずれとなり、其の間に伍することは出来ない、而して是等最高位の人々は、孰れも皆識慮人格ある者と思はねばならぬ、故に氏が銀行家となり、更に進んで大銀行家となり、一國金融の關鍵を握らんせば、上記する人物に伍して耻しからぬ識慮品格を持たねばならぬ、而して氏は實に之を持つて居た、此の間に處する氏の知識慾も稱すべき苦辛

は、非常であつたらしい、併し諸事に器用なるは天性の明敏なるが爲め、人の話を受入れることも早く、所謂往を告ぐれば來を知ることも云ふ程であつた、或は他人の談話論説を聞き、或は書冊雜誌を読み、種々の手段を以て、自己の修養を企て、人知れぬ間に自ら識慮を鍊つて、其の地位の高まるに共に、其の人品を進めて行つたのである、實に敏慧とも云ふべきか、器用とも云ふべきか、寒微より出でた無教育の身を以て、斯ほど迄に人格を仕上げたのは、實に珍らしい材である、世間の富豪の中には談が偶々國家の大經濟などに亘る者、或は頓珍漢の應答を爲すものも尠からぬ様であるが、氏は決して此の類で無かつた、或人が氏を評して、若し彼をして官海の人たらしめば、尙裕に高級の地位に上り得たであらうとは蓋

し當を得た言であるかも知れぬ、氏は何事も器用であり何事もやつてのける、實に調法の材であつた、余は氏と初對面の折、氏の言語應對の品格よき所から、定めて相應なる富家の出ならんと思つた程である、氏の歿後に至り、家人が座右の秘書冊など片付けし折、英學手引も稱すべき書などを看出したと云ふ、左すれば氏は、あの繁忙多事の中に於て、人知れず尙英學獨修を心懸けた時代もあつたものと見える、(假令熟達し得ざりしにせよ)、大隈侯にも亦之と似寄つた話がある、余は永年の間、未だ嘗て侯が自ら洋書を読むを見しこと無かりしが、或人が嘗て急用の爲め、侯の寢室に行きしに、侯は燈下にて字引を用ひ、英書を研究しつゝあつたと云ふ、右は其人から余が近頃聞得た直話である、大業を成す人々が、

人知れず内證にて、こつそりこ、斯る心懸あるは又面白いと云はねばならぬ。
氏は其の天性、案外涙脆き方であつた、時折甥姪等に遇ありて之を訓戒する時など、往々眼中に涙を含むことが多かつた、又芝居を観る、義太夫を聞くにも、哀れな場合には、常に落涙するころが多かつた、故に殺生を好まず、人より生魚を贈らるゝ時は常に之を邸内の池に放流せしめたものである、右に付いて地方に巡歴の節、隨員が困つた一話が今に残つて居る。
或時、氏は雲州に旅行した、そこで鄭重な饗應を受け、後、旅宿にて調理せしむる爲めにこて、大なる鼈を數多贈られた、氏は例に依つて直に之を川に放たしめんことしたが、狭き土地の事ゆへ、すぐ人にも知れる、然るこ

きは先方の折角の厚意を無にして、如何にも面當がまし
くも見ゆるを悞れ、快く之を受け、遠く此の地を去つて
之を放たんと考へ、鼈を神戸まで態々持ち歸つたが、未
だ汽車の便なき時の事にて、随員は是の餘計な荷物に大
閉口を爲せしと云ふ、而して神戸にて之を放ちし時には、
已に其の半數は斃死して居つた由、併し是も鄭子産の使
の如く、煮て食ふたか、否かは保證の限りでない、兎に角
態々雲州から神戸迄持ち返つて、之を放つたのである、
併し其の人が事業の世界では、全く別人の如く嚴格、否
な嚴格と云ふよりも寧ろ唯契約を履行するに忠實な人で
あつた。

第三 前記の三

誘惑 惡戯 強健 模範の商家 使用人の
仕込 其實實 人無きにあらず

氏は壓迫に對して、剛強不屈であつたのみならず、誘
惑に對しても、亦剛強不屈であつた、前者に對抗するも
容易でないが、後者に對抗するは、又一層の至難である、
俗諺にも、『好男子身が持てぬ』と云ふ、青年の好男子に
は、色界の魔障が特に多い、況んや之に加ふるに、金廻
りの宜きを以てすれば、尙更らの事なるをや、然る處
氏は充分之に合格して居た、若年の頃は、其の風丰秀麗
で、態度は溫和であり、言語は愛嬌あり、財囊も空しから
ぬ、(小ながらも兩替店の旦那で)近所の女小供にも騒がれ

る質である、苟くも足を花柳界に投ずれば、大歓迎を受くるに足り、身を持崩すべき資格は、充分に完備して居つた、又兩替屋仲間の交際で、狹斜の地に入出すべき機會も多かつたに相違ない。

假令其の胸中に、色界以上の大望を懐き居たるにもせよ、多少の風流事は世間に有り勝ちのここである、然るに氏は能く斯る誘惑に打勝ち得て、絶えて攀花折柳の遊を爲さざりしは、幾ぞ常人に望み難き堅固の心志を持つて居たことを證するに足るのである、血氣盛なる壯年時代に於てさへ、此の難關を切抜け得る以上、既に相應の資産を作り、又中年以上に至つては尙更のここである、氏の平生を最も能く知り居る或老輩から、余は下の如き話を聞いたことがある。

氏が既に頭角を經濟界に露はして、屈指の銀行家となりし頃、其の親交者中には、好んで花柳界に出入する人も多かつた、就中政府の高官で、華族の榮典にまで浴した某氏、銀行界の巨擘を以て目せらるゝ某氏は、此道の強者であつて、又氏と殊に昵懇で、各處の宴會には絶えず同席する仲間であつた、或時右の二氏が、氏を其の仲間に引入れむと、相謀つて一計を廻らし、柳橋にて氏の最も喜び居ることを考ふる一美女に向ひ、密かに内意を授け、若し氏と懇懃を通ずるを得ば、莫大の賞金を與ることを約した、妓は固より望む所とて、充分に之を承諾した、因つて二氏は此事に便なる或機會を與へ、氏と妓とをして相狎れしむるに充分なる場合を作つた、是に於て彼の妓は氏に向つて、心のたけを打明け、之に繼ぐ

に涙を以てした、此の時氏は悦んで其の好情を謝した後之を諭して曰ひけるは、御身もまだ年若く、是から充分に賣出して、土地第一と稱せらるゝ大望を持つて居るこゝであらう、余も亦少しく望を持つて居る者である、然るに、今若し艶聞でも廣まりては、御身の爲には出世の妨げ、余にも少からず迷惑の種となるであらう、因つては兩人ともに其の志を達せし上の事ごしたら、ごうであらうご、優しく懇に慰められて、事済みご爲つた、夫の二氏も此の失敗を聞いて大に頭を搔いたご云ふ、右は氏が既に中年以後の事でもあり、是等の艱に掛らぬは不思議もない、唯氏の感すべきは、壯年血氣の廿歳臺から、三十前後の頃に於て能くも色界の魔障を排し得たご感嘆する、安田善次郎ごなるには、又斯る難關をも切抜け來ら

なければならぬのであつた。又氏が成功の一因は、之を其の身體の强健にも歸せねばならぬ、氏は中肉中脊で恰も肥瘦の中を得て、がつしりご緊つた體格である上、幼年時代から艱苦に遭遇し、飢寒に堪へ辛苦を忍び鍛へ上げたものである、所謂其の筋骨を勞するごこも、十人以上であつた、之が又成功に必要である、何ごなれば凡そ事を誤るの原因は躬自ら其の境を踏み其の事を實驗せずして、他人の言を輕信するに因らぬ者はないからである、事業の成敗は、初に聞く所ご、後に見る所ごの相違より生ぜぬものは少い、氏は飽くまで此の呼吸を呑込で居た、故に苟くも其の爲さむご欲する事は、必ず躬自ら之を實査せねば承知せぬ、例せば或鐵道敷設に資金の申込みを受くるごせん歟、己れ

必ず先づ其の地を充分に踏査し、利害を確信するに至らざれば、決して之を承諾せぬ、又或工場に放資を望まらざれば、躬自ら其の事業ご其の現場ごを實査するにあらざれば、承知せぬ、銀行の一支店を設くるか又は之を合併する等の事あるごきも、躬自ら先づ其の地の盛衰及び人氣の如何迄も實査して、然る後でなければ之を承知せぬ、故に氏の一生中、其の足跡は、幾ご海内に遍しご言つても宜いほどである、北は北海道のはてより、南は鹿兒島、琉球、臺灣に至るまで、氏の足跡を印せぬ處はない、何事に付いても悉く皆實地を調査せねばならぬ、貸金の申込みを受ければ、其の擔保たる土地の調査に出懸る、山林の抵當を申込まれるば其の調査に出張する、而して其の行先きは便利なる繁華の都會のみでない、隨分

不便極まる山郷僻地も多い、それにも辟易せずして必ず之を跋涉し、利害得失を研究する、故に氏の日記を閲するご、一年中に其の旅行の頻繁なるご驚くべきものである、それも五年十年に限られず、長き一生を通じて此の如くであつた、右の如き苦勞は大抵の體格の者にては、迎も堪へ得る所でない、僅か四五年の間ごても、其の眞似は出来ぬ程のものである、又其の旅行先に於て如何なる難澁に遭ふも、少しも之に屈託せぬ、男爵武井守正氏は、氏ご年來の知人で、山林などの調査に同行せしごも、ありし由なるが、窮境の僻邑なごに投宿して、南京米以下、の粗飯を饗せられしごもある、武井氏も壯時には随分困難を経て來た人で、大抵の事には閉口せぬ方なるも、幾ご之を口にし得なかつた、然るに善次郎氏は得意氣に

獨り鼓腹して、喜んで居たには驚き入つたことは、同氏が
 ら聞きし所である、實に此の如き強健の體格を有せざれ
 ば、又安田善次郎は爲り得ぬのである。
 氏が江戸にて、始めて小店の主人公となつた時は、幕
 府の末年ながら、まだ封建の世である、假令幕府は危ふ
 く見え、行くゆく天朝の御政治となつたこと、封建制度
 が近く全廢されようことは、當時の有識者すら、之を察し
 得なかつたのである、況んや理財一方にのみ心懸くる商
 人の身に於てをや、恐らく何人も將來大變動が生じ來て
 今日今日の如き世の中に爲り得べしことは、思ひも寄らぬ事
 ある、封建制度の骨髓たる、夫の士農工商の四民が各々
 其の業を世襲する仕組は、いつ迄も永く繼續する者か假
 定し、之に應じて萬事を計畫するのは當然のこゝである、

國家一切のこゝは、獨り士族のみの爲すべき本分である、
 素町人は單に富を積み家を全うすれば事足り考へら
 れた世の中である、特に商人は四民の最尾に置かれ、士
 農工の下に立つ者として、末作の民と卑しめられた程
 である、故に當時致富を心懸くる商人は、大に今日今日其
 の趣を異にして居た事を知らねばならぬ、氏の如きも亦
 其の胸中には、一切の模範を、江州商人等の家風家風に取つ
 たのも無理からぬ事である、店向きは一切質素儉約を主
 とし、手代番頭に至るまで、其の頃に所謂御店風の様式
 に依つて育て上ぐるを第一と考へたらしい、衣服は唐棧
 に限り、絹物を着るは御店者の恥とせし如く、何事も此
 の流儀で進んで來た、斯くて四五年を経過する内に、幕
 府は倒れて王政の世となり、氏の財産も思ひの外、早く

膨脹するに至つたが、使用人をば尙従前の御店風に仕立てることを主とした、是れ氏の業體が兩替店爲替方銀行等の如き極めて地味なる性質の者であつたからである、若しも三井物産會社杯の如く輸出入の貿易を主とし其の懸引の華々しき業務ならんには、新式に人材を仕立てる事も必要なる譯であるが、銀行爲替業は元々金貸屋である、金貸業には手堅き人物を主とする爲め、従つて舊式が適合するのである、是れ氏の身代が益々膨脹するに至つても、尙舊式にて事足りし所以である、故に氏の中年までの間、即ち前半生に於ては、舊時の商家に共通なる御店風を使用人を仕立てる事を第一義としたのである、然る處、其の後半生に至つては、世態に大變革を來たし、舊風を變ぜねばならぬ様になつた、明敏なる氏は

忽ち之を覺り得て、漸次に其の方向を新式に轉換したが尙ほ幾分の舊式を加味することをば忘れなかつた、前にも記する如く、使用人に最も多く活潑の才を要するのは貿易業で、製造工業又之に次ぐ、銀行業務は却つて地味な人材を好むのみならず、善次郎氏は何事も、之を自らしなれば承知せぬ人である、故に事を謀り事を決するも多く自己の一存に出で、使用人は忠實に其の命を奉ずるを可とするの考があつたかも知れぬ、是等種々の理由からであらうか、氏が初年及び中年に、其の使用人を擇ぶには、専ら忠實を主とした傾があるかと思はれる、又昔時の大商店が使用人に對する仕向方は極めて質素であり、使用人等も亦之に甘んじて居た、永年の勤續者には暖簾を分つこか、紋服を賞賜するこかの類である、氏は

又た此の御店風を以て使用人に臨んだから、新式を主とする他の銀行、商店、會社等に比較して使用人の待遇が薄きに失する如く評せられたかも知れぬ、併し氏自身から言へば決して不思議はないのである、何となれば其の胸中の模範が、既に上記の通りで有つたからである、氏の身代が後年非常に増大して幾千萬圓となり、使用人の數も幾千人に上るに及んでは、其の末端下班までは、目の行届かぬ所も有つたであらうが、當初小身代の時に當つては、人を見るの明に於て驚くべき所があつた、何となれば其の主なる使用人等は打揃つて忠實至極の者が多かつたからである、其の例の一二を舉れば、氏が新に兩替店を開きし頃、使用した十六歳ばかりの丁稚があつた、此の者に現金を持たせ横濱に赴かしむる途中、築地

にて不幸にも汽船の汽罐が爆發し、多數の死傷者を生じた、此の丁稚も重傷を負ふて不幸の死を遂げたが、死に至るまで主人の金を失はじと努め、金のこのみ囁語を吐きつゝ、絶命した、傍人皆其の忠實を憐まぬ者はなかつた云ふ、其の金は當時の氏に在りては非常な大切なもので、氏は後年に至るまで、此の丁稚の家を手厚く世話をなして居る、又氏の店の最初の番頭役を勤めた忠兵衛の如きは、實に忠實無比の評判を取つた者であつた、其の他氏が拔擢して店の要地に置いた者は、皆忠實ならざるはなかつた、併し既に大銀行家となり幾千の人を使用するに至つては、一々自ら之を選抜採用する譯には行かぬ、其の末流に時として不心得者を生ずるも、亦餘義なき次第である、併し氏が自ら撰擇する範圍の者に至つて

は、何れも忠實の者のみである、而して全體より論ずれば、總體の使用人中辛抱し切れぬ者は早く中途に退き去るか、又は不正を働きて落伍する、斯る淘汰を経て永勤した者は、皆非常に忍耐勤勉な者である。

又幹部たりし使用人中には、本來才幹ある人々多かりしも、氏の好む所の型に嵌められて、其の鋒銳を現はさず、唯手堅く質實に勤務し居るに過ぎなかつたが、若し彼等を放つて其の才を發揮せしめなば、随分縦横の手腕を振ひ得べき力量ある者も多かつたであらう、少くも我々が知る所の人々は此の如くであつた。

又氏の後半生も稱すべき五六十歳以後には、既に安田家の事業は非常に手廣きものとなり、如何に明敏なればこそ、氏は三頭六臂の人でない限り、自己一人のみを

以て百事に當り、一の失敗なしと云ふ理窟はあられぬ、如何に細心にして注意周到なる氏を以てするも、尙失策失敗の多々あるを免れぬ、然るに大破綻なきのみならず年々與に家運の盛んとなりしは何故であるかを思はねばならぬ、是れ皆一に忠實なる使用人等が、氏の過を補ふに依るからである、彼等の或者は失敗を事前に豫防し、或者は破綻を事後に彌縫し、或は顔を犯して忠言を憚らざる人もあり、或は陽に其の意を承順して、陰に其の失を諷諫する人もあり、内外表裏に斯く過を補ふ部下ありてこそ、始めて彼の絶大なる資産が作り得られたのである、しかも氏の晩年に至り、使用人に對する手當も、世間に劣らず手厚くなりたれ、中年の頃には他の銀行會社に比して、決して多しとは云へぬ程の割合であつた、然

るにも拘らず、能く使用人等の心を得る事斯の如き所以のもの、氏が部下に對するに優しくして、人の懐つく一種の徳を備へて居たからである、「威其の愛に勝てば誠に成る」の古語の如く、氏が事業上に於て、部下に對するの威は其の愛に勝ち、随分やかましく嚴格を極め、毫も節度に違ふことを許さぬ流儀であつたが、然も尙云ふ可らざる温情が其の間に流露して居たに歸せばならぬ。

第四 前記の四

羨むべき一の幸福 父の健在 致富の二
法 稱賛と嫉惡 不移怒不宿怒 取膳の
話

善次郎氏の一世を通じて、最も快心で、最も幸福で、最も人に誇るべく、最も我々が羨ましく感ずるのは、嚴父の健在中に、氏が早く世上著名の人物と爲り得た一事である。

凡そ人が、壯年時代に早く其志を得ることは、誠に少ないもので、十の八九は、中年以後の成功である、特に其の多くは晩年である、故に我が父母に立身出世を見せ、之を喜ばせ得る者は實に寥々たるものである。

古人も「富貴は須らく身を致す早かるべし」も云ひ、又「子養はむご欲すれども親待たず」も云ひ、「孝行を爲たい時には親が無し」この俚諺もある、總て人が身分相應に志を得たときに、先づ之を見せて喜ばせたいのは其の兩親で、次は伯叔父母や親戚故舊知人である、是等の人々に見すればこそ、立身出世の甲斐もあると云ふもので、是等の人々が、最早や皆世を去りし後に至つて、我獨り志を得たればこそ、誰にか誇り、誰をか喜ばすべき、もしも我が身に富貴を得るの運命あるものならば、古人の言ふ通り、身を致す早かるべしで、一年でも半年でも早く成功したいものである、處がなかく、左様に行かずして多くは兩親の歿後となる。

然る處、氏が稍と己に其の志を得て、世上屈指の銀行

家の中に數へられ、日本銀行創立の委員にも選ばれ、同銀行最初の割引局長囑託ともなり、經濟世界に於て、一流の人物となりし時にも、氏の親父は實に健在であつたのである、氏の父善悦氏は明治七八年に東京に迎へられ、明治廿年頃に歿したが、其の間十幾年は、善次郎氏に取つて實に幸福な歲月であつた、善悦氏に取つては尙更の事である、善次郎氏の日記を見るに、芝居の替り目毎に、又は大相撲の催しあるごとに、必ず家族と共に父を奉じて見物に行かぬ事は無い、其の他、春の花、秋の紅葉は云ふに及ばず、凡そ其の心を慰め得べしと考へる處には必ず父を奉じて行た、此の一事は蓋し氏の生涯の最大幸福と羨まれるべきものである、氏の慈母は氏を膝下から遠離して出府せしめ、未だ氏の成效を見るに及ば

ずして早く歿し、氏は之に對して孝養を盡し得ざりし憾ありしより、生存せる父に對する孝養には一層の心を盡したらしく見ゆる、親父善悦氏は、善次郎氏が出世して以來、我が身に何の不足なく、子孫の繁榮を見るのみならず、苟くも己の親戚縁類たらんものは、善次郎氏の御蔭にて皆其の處を得、不自由なく生活するに至り、満足から満足のみで、何の思ひ残すこともなく、世を去つた、斯の如きは親に取つての幸福云はんより、子に取りて無上の幸福云はねばならぬ。

善次郎氏は其の父母祖先に對して、一寸も風變りの仕方を爲した人である、世人は大抵神社には正月元旦に參詣するが、寺詣りをする者は少いやうである、然るに氏は毎年恆例として、元旦に起出ると先づ四方拜を爲し、

家族と雑煮を祝ひ、それから必ず父母祖先の墓に年始詣りを爲たことである、是は何十年間、幾ぞ廢したことがない、死する年迄も、此の通りであつた、氏の知人中に、其の妻は伉儷の情の、極めて深き人が有つた、妻の歿後に巨費を厭はずして壯麗な墓を築いた、氏は其の墓を見て曰く、「夫人をあの上り鄭寧にせらるゝは感服ですが、父母の墓は又あれ以上に爲られたでせう、ねえ」さて微笑したことを、余は今に記憶して居る、氏は是等の點に能く留意した方であつた。

氏が一方にて世人から稱賛せられる事柄が、一方には又暗に恨を買ふ種子と爲つて居たのは是非もない事である、凡そ巨富を致すには二種の手段がある、其の一は官

府を相手とする事、其の二は民衆を相手とする事である、
官府を相手とする事は、官府の御用品を納め又は拂下品
を受け、又は運送を引受る等の類である、民衆を相手と
する事は、世人一般を相手として取引を爲す者である。
凡そ商賣取引は、本來賣人にも買人にも、双方に利益
あればこそ、成立つ筈のものであるが、事後になつて回
顧するに、一方には利となり、一方には損となつて居る
場合が多い、損をした者は失敗し、利を得た者は勝つた
如く考へて居る、敗者が勝者を恨むは人情の常である、
然る處官府は國內唯一の有力者であり、又大富者であ
るから、其の相手方に、多少の利益を得られたとて、之
を恨む者ではない、唯第三者たる世間が、之を妬み羨む
に過ぎぬ、然るに世間一般を相手とする者は之に反して、

取引の相手は多く微力にて、而かも多數である、是等多
数の人々は恰かも自己の利益を奪ひ取られた如くに思ふ
かも知れぬ、故に善次郎氏は官府を相手とせずして、能
く巨富を致し得たに、世人から稱賛せらるゝけれども、
之と同時に又或部分の恨を受ける場合もあつたであらう
と思はれる、是官府を相手とする者よりも、民衆を相手
とする者に、不利の多き一であらねばならぬ。
氏の使用人等が氏に對する評を聞くに、氏は随分口や
かましかつた方で、少しでも節度に違ふと、随分手痛く
叱り付ける、併しごごこなく温情のある人であつた、こ
云ふここに皆一致して居る、又毫も怒を宿さぬ人で、一
事の失錯は非常に叱り付けるけれども、他事に關しては
全く別人の様で決して之に怒を移さない、又午前には怒

ても、午後には闊然として、幾ご意に介する所がない、
況んや今日の怒を、明日迄でも持越す云ふが如きこと
は、幾ご無かつたこと云ふ、又人の阿諛に類する言動を喜
ばずして、非常に之を嫌悪した、自己が若年から、險惡
の風波を凌ぎ、百戦を経來つて居る苦勞人だけに、甘い
も酸いも飽くまで萬事呑込んで居る、故に漫りに之を喜
ばせやうごか、煽動てやうごかしても、なかく其の手
に乗らぬ、直に見透されて仕舞ふ、それであるから、部
下は皆恐縮して、其の明察に閉口する、然るに氏の考違
ひ又は失策ならんこと認むる事あるに當り、使用人が顔を
犯して其の不利を説く者があること、一時は不機嫌である
が、暫くの後には非常に之を喜び、其の人を優賞する事が
少なくなかつた、又主人の怒を畏れず、之に抗論するが

如き忠實硬骨の人を、余は往々彼の使用人等の中に認め
得たのである、兎に角、一時は怒つても忽ち、思ひ直し
て諫を納れる氏の美德は、今日に至るまで使用人等が追
憶して、昔を忍ぶ種子となつて居る。
屢々記する如く、商取引に於ては嚴格を極めて、少し
も假借せぬが、他の一面には、ごこかに濫情あつて、そ
れが自然と流露する事實が頗る多い、單に人を御する方
便のみでは無かつた様である、山中清兵衛氏今の清兵衛
氏の父にて、先年物故すは書畫好きにて余の知人なりし
が、氏は丁稚時代より善次郎氏に使はれ、漸次に引立て
られて銀行役員となり、後には獨立して兩替及び株式仲
買を営み、相應の資産家と爲りし人なるが、其の談に、
氏が銀行員たりし頃、因作二州に急行を命ぜられて出張

し、商用を果して歸京するや、草臥れを厭はず直に善次郎氏の許に報告に行つた、時恰も夕方であつたが、氏は喜んで其の勞を謝し、夕飯を與にせんとして、家人に其の支度を命じた、膳を進むるに至つて、二人に別々の膳を出だせし處、氏は給仕に向ひ「あつ、取膳にして呉れるこよかつたが」と言ふた、取膳は兩人が一の膳を共にして食するので、それは最親の同輩間に限ることになつて居る、然るに御主人が、自分と取膳で食するつもりであつたかと思ふたら、涙がこぼれやうとした、自分に取つてこんな有難い事は無い、此の人の爲めなら、どんな事でも、奮勵しやうと思ふたさうである、こんなことは、折々あつた事だと言ふ、右に限らず他の使用人からも、往々似寄の話の聞くことである。

又使用人を信用して、一たび或事を擔當せしむる以上は、一切打任せて、あまり掣肘せぬ、又やかましくも言はぬ、故に託せられた人々は、非常に責任の重きを感じて、之に従事する有様であつた、又決斷の早い人であつたから、何事を報告するにも、一から十まで、くどくしく言ふに及ばず、半分も述べれば、すぐ要領を呑込み「あゝ宜しよし、夫れで遣れ」と云ふ風な調子で、何事も早く埒の明く人であつたことは、今に至るまで使用人等の説く所である。

第五前記の五

明察——己を以て人に望む——舊時の商店風——
進んで止まず——完人と仁人——情緒の人——悠
揚不迫——損得に對する喜憂

人の缺點は、多く其の長處に伴ふが常である、善次郎
氏に缺點が有たさすれば、又其の特有の長處に附隨して
居らねばならぬ。

總て人の上に立つ者は、幾分かぼんやりとして、鷹揚
な處が欲しいものである、古人も、『水清きに過ぐれば魚
棲まず』と言ひし如く、在上の人が、餘り明察に過ぎて何
事も見透すやうでは、使用人等は手足を措く所なき様に
感ずる、此の點に至るこ、氏は天性明敏で、何事も見透

す性質であつた爲め、使用人等は頗る窮屈に感じた様で
ある、ごちらかご云へば明察に過ぎて、韜晦に缺けて居
たかと思はれる、是が一失とも云へる。
又自己が幼時より如何なる難苦にも堪へ來り、極度の
質素に慣れ、不自由を物ごもせぬ習性があつたから、他
人も亦此の如しと思惟して、動もするご自己ご同様の難
苦を他人に求めた、凡そ人ごしては、誰でも此の如き辛
抱をなす筈のもの、爲さねばならぬものと思ふて居た様
である、故に所謂己を以て人を律し、他人に在つては
堪へ難きごも、左程に思はなかつたかの様にも思はれ
る、凡そ人を御するには、忍耐も勤勉も、皆中庸の程度
を標準ごして、之を人に求めねばならぬ、處が氏は己の
堪ふる所は人も亦之に堪ふべきであるご考て、之を人に

強ひた場合があつたかも知れぬ、かゝる事よりして冷酷なりこの評を受ける事を免れなかつた。

加ふるに氏が當初胸中の模範させし近江商人杯の商家風則ち俗に所謂御店風より云へば、使用人等は其の手當も僅少で、永年勤続の後には、紋服の一襲をも受け、暖簾を分けて貰ふ位に過ぎず、そして主従共に之に満足して居たものである、然るに物換り時移り、維新の後には會社銀行の使用人等も、毎月相應の給料を受取り、萬事費澤となりて、紋服の幾襲、暖簾の分與よりも、幾百千圓の手當を受くるを悦ぶ世の中を爲つた、明敏なる氏は其の後半生に至つて、早く此の變遷に心付きたれども、元々胸中の模範は彼に在つて此に在らざりしが故に、其の前半生は動もするこ、御店風を以て部下に臨まんとする

の傾を免れなかつた、之が爲め安田家の使用人は、他の銀行會社に比して、手當が豊かならぬ様に見做され、従つて其の主人公も、薄恩の仕打多しこの評を受けたのかも知れぬ。

商賣には其の取引を嚴格にし、互に假借せぬ事は普通の法則さは云ふものゝ、一方の相手は數千萬圓の巨資を擁し、一方の相手は薄資者であるすれば、薄資者は自然に無理の注文や、身勝手の苦情を並べ、其の憐みを乞ふは人情の免れぬ所である、此の場合に於て富者たらん者が、其の間に手心を加へ、百の利益を九十に止めて、残る十を相手方に存留せしめんには、其の人の事業に、一の光彩を加へ、世評もめでたき者である、然れども此の如きは事業上に慈恵を混ざるものにて、商業の常事こ

は云ひ難い、且つ已に成立せる世間の富豪中には、往々之を能くする者あるべきも、新に財を積まんとする努力中に在る者に向つて、之を望むは困難である、氏の如きは、今や方に其の努力最中の身である、故に氏に向つて之を求むるは、又無理な註文である、併し世人の或者は之を恕せぬ様であつた。

氏は又何處までも、進んで止まざる、不思議な根強い性質の人で、苟くも或地步を得れば、之を踏臺として必ず其の上に登らんとする、寸を獲れば之に依つて尺を得、尺を獲れば之に依て丈を得んとし、行き得る處まで行かんご欲する風であつた、故に十萬を積みば百萬とし、百萬を積みば千萬とし、更らに億萬までにも上らんとする、是が氏の一生に巨富を致した必要の特性である、然るに

他人は之を目して『足るを知らず、飽くなきの人』と評する、若し氏をして知足の方針に出でしめたならば、彼の如き絶大の富は、到底致し得られぬ筈である、故に氏に向つて足るを知れご望むならば、其の富を棄てよご云ふに等しい、是亦望み難き註文である。
又辛苦して巨富を致し得た人は、之を守らんが爲め、非常の苦心をなすは世の常である、大抵の事をば犠牲にして、永く之を子孫に傳へんとする、従つて親族一門をば、嚴格なる家憲の下に置かねばならぬ、然れごも此の心を察せぬ者より見れば、如何にも過嚴の人らしく見ゆる、凡そ人の行に於て、正を守るを義とし、惠を施すを仁と云ひ、兩者の區劃自ら整然と分れて居る、他人に對して一の不義理をなさず、一の迷惑を掛けず、能く我

が家族一門を養ひ得れば、則ち立派に正を守り義を盡せる一個の完人である、人たるの道は最早や是にて充分である、然るを尙一步を踏出し、其の餘行を以て他を恵み人を助るは、則ち善を施し仁を行ふのである、今日の流行語で云へば、義は消極のもの、仁は積極の者である、義と仁とを兼ね行へば、是に超すことは無いが、已に義を盡せば、仁を行ふに至らずとも、缺行の人では無い、天下の人皆斯の如き完人たらば、世の中に仁を行ふ必要は無い筈のものである、併し人の習癖に依つて、一方には不義理を爲しつゝも、一方にて仁を施すを好む者あり、又人を恵むことを好むも、自家の經營に拙劣な者もある、或は先づ義を盡して、然る後ち大に仁を行ひ恵を施さんご心懸くる者もあり、實に世は様々である、然る處、世

人の多くは、富豪金満家が完人たるのみでは承知せぬ、尙進で大に仁を行ひ恵を施せし望むのである、しかのみならず其の恵を施し仁を行ふの大に早からんことを求めるものさえある、而して善次郎氏は、仁を行ふに意あるも先づ正を守り義を盡すに重を置き、恵を施し仁を行ふは之を或時機に、或方法に據らんご、考へて居た様である、余が多年の交際より知る所では、氏は小善を喜ばずして、常に下の如く考へて居た、一時の賑窮も善事には相違ないが、與へた物が盡くれば、其の人は依然たる貧困である、唯人の助けに依つて唯一時の快を得たに過ぎぬ、又之を屢すれば怠惰の習を長ずる計りである、故に此の如きは人を益せずして、却つて之を損ずるごが多い、むしろ職業を與へて働かしめ、其の人をして永く困窮を

脱せしむるに若かぬと、故に氏の故舊又は其の子孫杯が
困窮を訴へて來るときには、確實なる方法を持出し、此
の如き事業、此の如き方法を以てするから、將來永く貧
困を免れ得るに申込むときは、其の事柄を調査し、果し
て的確であれば、大に喜んで直に救助したものである、
若し之に反して、何等の方法見込をも立てず、唯一時の
助けを求るときは、頗る不機嫌で、餘り多くを施與せず、
又は之を辭するが例であつた、總じて助を求る人が、永
久に貧境を脱する企ならば、いつも喜んで之を救助する、
一時の惠ならば多く與へざるのみならず、或は之を斷わ
るに云ふ風であつた、故に此の呼吸を呑込み、方法を確
立して援助を乞ふときは、必ず十の九までは容れられる、
一時の惠を望むときは、十の十まで斷わられた様である、

氏は又商取引に嚴格で、取引上の契約を國法の如くに
見做し、互に之を逾越せぬ事を悦んだ、若し互に退讓を
望むときは、商行爲は到底成立し得られぬからである、
凡そ其の事業の狭少なる者は、人に對する取引の度数も
金高も知れたものである、故に之を交讓するも、左まで
の大損得はないが、取引の大規模なる者に至つては然ら
ず、若し常に退讓を事とするときは、双方の所望に、は
てしなく、到底事業が行ひ得られぬのである、是れ氏が
契約履行に嚴格なる所以であつたが、相手方は、人情の
常として、多くの假借を氏に望む者が多かつた。
又氏は、事業と私交友誼とを、全く區劃することを悦
んだ、私交友誼は篤しとも、取引上に於ては之を混同せ
ぬ、取るべきは取り、與ふべきは與へた、然も尙、氏に

交際ある者の中には、私情を雑へて取引を緩和せんことを望む者も少からざりし様である。

世人の多くは富豪に向つて、完人たると同時に仁人たらんことを望む、而して氏は先づ完人となりて後に仁人たらんことを欲した、世人の多くは事業取引にも私情を混ぜんことを望む、而して氏は全く之を區劃せんことを望む、世人の多くは富豪が財を積つ、之を散ぜんことを望む、而して氏は先づ大に積みて後ち大に之を散ぜんことを企てた、氏は事を處するに極めて緻密である、緻密の極は苛察に類する、氏は極めて嚴格である、嚴格の極は冷酷に類する、若し世上の或部分に於て、氏に對するの批難があつた、若しれば畢竟右の譯合に職由する、而して氏は更に是等の批評に頓着せぬ、何となれば自己の所行は理に悖ら

ず義に背かずと、飽まで信じて居たからである、若し氏にして其の所信の勵行に、少しく手心を加へたらんにはかゝる批評は容易に之を打消し得たりしならん、氏に對して若し批難があつた、若しれば、蓋し以上列記する所に他ならぬであらう、尙ほ氏の性格、習癖を知悉せしむる爲め、雜然として無秩序に、余が知る所の事柄を左に列記する。

或は氏は若年から攀花折柳の遊に耽けらなかつた、聞かば、氏を以て冷々たる木石の如く思ふ者もあるべきが、事實は之に反して、氏は元風流情事を解し得る多恨の人であつた、故に其の手控日記などの中に、某々の宴會には、非常な一美人を見た、なご、戯記したものがあつた、左すれば氏の眼にも、美人は矢張り美人と見へたのであ

る、小町も醜女に見えた譯では決してない、又器用であるから、若年には富本に堪能で、爪弾きで端唄云ふくらはは爲し兼ねぬ多情多恨の風流子の資格を備へて居た、唯其の胸中の大目的達成の爲め、己に克ち得たに過ぎぬのである。

又氏は吝嗇なる守銭奴にして、十圓の金を人に贈るべきところも、一圓にて之を濟ませる人ならんご、氏を誤想する者もあるやうであるが、それも間違つて居る、其の一例を擧ぐれば、嘗て氏の自作に係る三四枚の文稿を或文藝家に托して、添削を求めたところがある、氏は器用であるから相應に出来て居り、其の人が筆を加へた所は僅かに、三四箇處に過ぎなかつた、ところが後ち其の禮として、最上の鹽瀨白羽二重一疋を贈つた。

右は余の親く知る所である、決して菲薄ご目すべき謝儀では無い様である、其の他に類するところが往々あつた、故に氏は強ち何事にも、儉約ではなかつた、唯無用の場合に、有用の財を多く費さぬ、ご云ふだけである。併し其の昔、米一石の價が七圓内外、浴銭は僅二三文、鶏卵一箇が一錢にも上らぬ物價低廉の時代に生立ちし人は、昔になつむ傾を免れぬ、明敏なる善次郎氏にして此の今昔の金の桁の相違は、飽くまでも知り居るべき筈なるも、尙ほ昔時の慣を脱し兼ねたかも知れぬ、是等のところが節儉に過ぐこの評を起したかと思はれる、氏を目して何事にも、唯出し惜しむ人ごのみは云ひ難い。又自己の目的は、貨殖に在るからして、恬淡無欲なる君子の別世界あることを知らぬ人かと思ふご、それは又

大間違である、氏は是類の人の尊ぶべきことを能く知て居る、嘗て或地の旅行より歸京の後ち、余が面會せし時旅行中に此の如き君子人に遭逢せし事に語り及び、頻りに之を稱賛して居た事もある、是等も蓄財以外の事を知らぬ者とは、大に趣が違て居る。

氏の狂歌は、大倉鶴彦翁の如く口を衝いて出る程ではないが、稀に詠出するに、中々灰汁ぬけた面白いものがある、余は折々氏から其の近詠を聞かされたが、其の折は、いつも手控ご見ゆる小さな手帳より繰出された、因つて氏の歿後家人に話し、此の手帳を求めしが、未だ之を見出し得ぬ内に、大震災の爲に焼盡された事は残念である、左も無ければ一冊の狂歌集が出来たであらう、日夜唯貨殖にのみ心勞し居るべく見ゆる人に、斯る餘裕の

あるのも面白い。

又氏の甥姪中には、氏の邸内で成育せられた人々も少からぬが、是等の人々の話に依るに、氏は暇あるときは多く庭園に出で、樹木を眺め、又は植木屋を指圖して、其手入れを爲すが常で、いつも悠々緩々たる様子であつた、机に向ひ算盤を手にし、沈思熟慮する如き態度は、幾ぞ見なかつたと言ふて居る、金融業から一代に巨富を積み得た者は、多く日夜算盤と頸つ引をなす者のみである中に、其の巨擘も云ふべき氏が、却つて悠揚迫らざるここ此の如きは、是亦流石に時流を超越して居る、夫れも其の筈かと思はれるのは、氏が極めて思ひ切りの宜きことである、例せば或事に失敗して非常に損失を受けても、いつ迄も、くよくよ愚痴をこぼさぬ、其の當座は無

論善後策に苦心しても、忽ち之を忘れたかの如く、闊然
として居つた、右に付いては、氏の近親及び使用人等の
言ふ所が、幾ど皆一致して居る、蓋し氏は今之を失ふこ
も、又再び之を得る時機が来る、と云へる経験を積んだ
爲めかと思はれる、假に一時は大損をなすとも、或機會
が到來すれば、又大儲けをなすは珍らしからぬ、「災も三
年たてば役に立つ」の諺の如く、一時は損失と思ふ事も、
堅忍持久する中には、妙な風の吹廻はして、又非常の儲
けになるものである、かゝる實例を、幾たびか實驗し來
れば、成敗のたびに、大なる喜憂を懐かぬ様になる、故
に多く世故を経て得失の場數に慣れた者には、往々見る
所である、大隈侯杯もやはり同様の風が有つた、侯は事
の成敗に逢ふて、甚だしき喜憂をなさぬ人で、愉快に樂

天的に見へた、成功の時には喜ばないでもないが、失敗
が來ても意外に悲みもせず、落膽もしなかつた、是は畢
竟、侯の局量の大なるにも因るけれども、又一は榮枯盛
衰の順環して常にす可からざるを悟つて居たからである、
所謂天下は廻り持と云ふ事を、切實に知つて居る、今日
内閣を失つても、三四年の中には、又入閣の時機が来る
と思ふて居たらしい、假令之を言語に現はさぬまでも、
總ての事情から、さう察せられて居た、財界に於ける善
次郎氏の態度も、多分之と其趣を一にして居たのであら
う。

第六前記の六

圍碁 書畫 大借金家 良將の退軍 根氣

善次郎氏が貨殖家に珍らしき多趣味の人なりしことは
已に上記せし通りで、謠曲も、乗馬も、茶の湯も、書畫
も、骨董も、大好きであつたが、其の中にも圍碁は、最
も好む所で、暇さへあれば師を聘し友を求め、無暗にや
つたものである、一連に引續いて二三十局を圍むくらは
は平氣であつた。

處が餘の事には皆器用なるに拘らず、圍碁のみは大下
手で、如何に熱心に勉強しても、餘り上達しなかつたや
うである、流石の勉強家も、免許を取る譯には行かず、
初段に對して六七目を置くぐらゐの所で、行き詰つたら

しいが、地方出張中にも暇さへあれば、誰彼を選ばず
相手にしたもので、其の邊に知人が無ければ先づ宿屋の
主人を引張り出す、主人が出来ぬ其の邊の碁好きの老
人を捜し出してもらひ、二日も三日も之を相手にする、
故に其の随行員中に相手になる者があれば、之と對局し
て厭くことを知らぬ、是には皆頗る閉口せし様子である、
碁の勝敗は、元數理より割出すこと少からぬ故、算勘
に明るい人の中に、名手が多かるべく見ゆれども、實際
は必ずしも然らず、又世事に於ては機略縱横の人も、碁
に至つては頗る拙劣なる例が少くない、豊公の如き天性
頓智縱横の人にて、碁は随分下手であつたもので、其
の頃の豪傑連を相手とし、無理やりに之を負かし、勝つ
た勝つたにて喜んで居たのである、此の稚氣ある所に英

雄の磊落さが窺はれる、又世間の智者必ずしも碁の上手でない、近き例は伊藤公なども、あれほど事理に通曉する才略を有しながら、碁は随分下手なりしこと、人の知る所である、善次郎氏の明敏を以てしても、知れ切つた手に全く氣付かざりしは不思議と思ふ程であつたことは、常に氏の相手をなせし人の直話である、もし氏の活きぬ筈の石が活き、勝てぬ筈の一隅が勝つたりするに、其の喜は非常であつて、よほど稚氣を帯びて居たこと、今も一笑話として遺つて居る、唯其の根氣よき天性は、此處にも發露して居た、又氏が書に巧なるは、人の知る所であるが、畫も亦晩年には一寸見られるだけは描き得た、世間では氏の畫は大黒の像に限る如く思ふ者多けれども、強ちさうでもない、時々余に贈りし品の中にも、大黒以

外のものが相應に多い、其の畫の二三を本書に掲げて置く、但し氏が畫に對して稍々熱心となりしは、其の晩年で、暇の時には手本を求め之を學んだが、先づ獨學自習で、素人としては相應と目すべきで、巧妙とは稱し難い、嘗て余に向つて、己の畫が甚だ拙きを憾む話ありし故、余は『畫は其の拙き處に妙があるので、若しも畫工の畫の如くならば、却つて趣を失するであらう』と答へしに、『左様かも知れませぬ』とて、笑つて頭を搔かれて居た。天性の書畫骨董好きであり、又充分の購賣力を有ち乍ら、能くも其の欲を抑へ得て、漫りに買入れなかつたことは感心である、併しよくよく欲しくてたまらぬ逸品に出逢ふときは、平生の誠めを破つて、内密に買入れた例も一二はあるやうである、併し右は中年以後の事で安田